

2018年度鳴門市人権地域フォーラム

テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2018年8月3日(金)13:30～16:30

■ところ 鳴門うずしお会館

コーディネーター A (松茂中学校教諭)

パネリスト B (1992年度板野中学校卒業生)

C (1996年度板野中学校卒業生)

D (2010年度応神中学校卒業生)

《司会者》

それでは、本日講師にお招きいたしました講師の皆様をご紹介します。恐れ入りますが、講師の皆様は、お名前をお読みいたしますので順次壇上の席の方にご移動いただきますようお願いいたします。

初めに、本日の人権地域フォーラムのコーディネーターを務めていただきます、松茂中学校教諭のAさんです。(司会者に促され、講師が会場に対し挨拶しながら順次壇上の席に移動する。その度に大きな拍手が起こる)続きまして、パネリストの皆様をご紹介します。介護福祉士(1992年度板野中学校卒業生)のBさんです。会社員(1996年度板野中学校卒業生)のCさんです。養護助教諭(2010年度応神中学校卒業生)のDさんです。それでは、A先生、以後の進行につきましてはよろしくをお願いいたします。

《コーディネーター A》

(笑顔で立ち上がり、元気よく)皆さんこんにちは。(会場から元気に「こんにちは」と声が返る中、1冊の本を取り上げながらゆっくりと噛みしめるように)今日もこの会場においていただいておりますが、2年前に(広島大学名誉教授の)原田彰先生が書かれた『差別・被差別を超える人権教育』～同和教育の授業実践記録を読み解く～。このご著書は1990年度と1991年度の板野中学校での部落問題学習の記録を解説していただいた論文です。この本が世に出て、そのきっかけで、2年前のフォーラムに、この本に登場する1991年度に板野中学校を卒業した3名が登壇し、パネリストとして板野中学校の同和教育実践について語ってくれました。

(じっくりと)その時に語ってくれた3名のうち2名が同和地区出身の生徒で、もう1名は、部落問題学習の中心として発言を繰り返してきた生徒でした。3人は、板野中学校で体験した26年前の部落問題学習ことを、まるで昨日のことのよう語ってくれました。その3人の語りを通して、私の心に強く刻まれたのは、地区出身の2人にとって、卒業してからの26年間はまさに部落差別との闘いだったということです。

結婚の時、友だちの家に行った時、本当に切ない体験をずっと噛みしめながら、それに負けまいと必死に生きてきた人生がありました。そのことを大勢の前で言葉にできたことが、彼らの人生をまた豊かにしていく。それをまた力にしていくということを本当に実感しました。

部落問題学習の中心的役割を担ってくれた地区出身ではないパネリストの言葉を通して実感したのは、あれだけ必死で頑張ってきた部落問題の取り組みが思い出なんです。地区の子どもたちにとっては、26年が闘いなんです。これが部落差別の現実だと思うんです。

これは部落問題だけではなくて、様々な状況に置かれた子どもたちが、いろんな現実を乗り越えながら生きています。その事実を通して、私たちは何を学び、何ができるかということ問い続けていくということがずっと問われ続けていると思うのです。部落問題の学習というのはなかなか自分の問題にはなりません。

私は、2年前に松茂中学校に赴任しました。地区出身である私自身のことをさらけ出した時に、「先生、担任の先生が部落の人間と言われて驚かない生徒はいないと思います」と生徒は素直に思いを伝えてきました。そこから子どもたちの部落問題に対する思いが、自分のこととして学んでいく世界が変わっていきました。見事に受け止めてくれた子どもたちを心から尊敬しています。この子どもたちとの出会いは私の大きな財産となっています。

(うれしそうに)昨年のフォーラムでは、その時の私のクラスの生徒が大勢の中で手を挙げて語ってくれました。その語り、その後の部落問題学習や、卒業式の日最後の学活の中での見事の語りとなって、子どもたちの中に生きて働いていきます。部落問題を学ぶということが、人権問題を学ぶということが、人間をこんなに生き生きさせていくんだということを実感します。今日も、全体学習という場で、自分自身をさらけ出しながら部落問題の学習を積み上げてきた3人のパネリストがこの後語ってくれます。

(改まった表情で一言一言に思いを込めて)今回、私は格別の思いでこのフォーラムの日を迎えました。実は、私自身の生きる支えであった。毎年度積み上げてきた私の実践を報告し続けてきた、佐藤文彦先生の奥様である佐藤芳子先生が先月7月24日に亡くなりました。

3年前のこのフォーラム、この会場で、私の父に対する思いや願いをまとめた道徳資料「スダチの苗木」について、鳴門市第一中学校の生徒会役員の皆さんが演じてくれた人権劇(映像劇として制作：反田 卓)を観ていただきました。その中に、日雇いの仕事をし、泥にまみれ、土にまみれ、働いてくれている父親の姿が映し出されます。感謝しながらも、その父親の姿を恥ずかしいと思ってきた私の思い。大学を卒業する時、初めて京都の下宿へ来た父親が、私を大切にしてくれた下宿のおばさんへの感謝の思いを込めて「スダチの苗木」を植える姿を中学生が演じてくれました。

その映像劇を受けて、フォーラムの後半、最後の最後のところで佐藤芳子先生が手を挙げられました。マイクを参加者(鳥取県倉吉市のSさん)に持ってもらって、「聞こえますか？聞こえますか？」と繰り返し確認され、ゆっくりと力強く語られました。それは、佐藤芳子先生ご自身の女学校時代の切ない体験。私の、親の仕事を恥ずかしいと思っていたその思いに重ねて、芳子先生ご自身がおじの仕事によって自分が支えられてきたにもかかわらず、そのおじの仕事を恥ずかしがってきた。職業差別という視点を踏まえて、先生ご自身の体験をこの会場に響かせるように語っていただきました。

(力強く)その語り、今も昨日のここのようによみがえってきます。その記録を読み返すたびに力が沸きます。自分の言葉で自分のことを語るということが、自らを癒し、仲間を癒し、人間として大きなものを残していくんだと思います。そんな学びを積み上げていく、今日のフォーラムにしていきたいと思います。

30年前に亡くなられた、私の教師としての原点として、多くの学びをさせていただいた佐藤文彦先生。文彦先生の亡くなられた後も、佐藤先生のお宅にお邪魔するたびに芳子先生からずっと力をいただき続けてきたことに感謝を噛みしめながら、佐藤文彦先生が亡くなられたのが1988年1月30日ですが、その年の元日にいただいた年賀状。その時の言葉を持ってまいりました。

(額を会場にかざしながら)これが最後の年賀状に書かれていた言葉です。「美しさを求めて生きる人生を」と書かれています。美しさとは何か。生きることの意味。それを問い続けていただいた佐藤文彦先生との出会いが、部落問題学習の、同和教育の、教育実践の土台となっています。人と人とのつながりの中で生きる力というのが沸いていくんだと思います。

(パネリストに温かいまなざしを送りながら)最初にBさんに語っていただくんですけど、彼女は、1991年度の板野中学校の卒業生たちがきちっと積み上げた部落問題学習を、仲間たちと伝統としての部落問題学習を受け継ぐという思いと願いを持って、卒業式前日に最後の部落問題学習、全体学習をしてくれと要求してきた中心となった生徒です。彼女は生徒会の副会長でした。その授業が、それ以後の板野中学校の中に全体学習を根付かせてきました。彼女がその年の卒業式で語った式辞の後半部分を紹介して彼女の言葉につなげ

ていきたいと思います。答辞の後半です。(当時に思いをはせながら)

「今、静かに目を閉じますと、過ぎ去った3年間の様々な思い出が浮かんできます。何もかもが新鮮で期待と希望に胸を膨らませながら臨んだ入学式。クラスがひとつになり、友情の輪をより広げた体育祭、文化祭。そして2年生の修学旅行は、自然の雄大さに感動し、戦争の悲惨さに触れ、平和への願いを強くした貴重な体験でした。

真夏の太陽の下で、雪の舞う寒さの中で、友と励ましあい、厳しい練習に耐えた部活動。仲間との戦いだった受験勉強。そして、学年、学校全体で取り組んだ部落問題学習。私たちは、この部落問題学習で涙を流しながら自らの思いを語る友に、差別の怒りに震えたこと、共感しあい、支えあい、仲間の絆を深め合うことができました。

本音を語る。たったそれだけのことがどれほど苦しいことか。私たちは、この学校でこの体育館で初めて知りました。部落問題学習に取り組んでいた時の私は、耀いていたと自信をもって言えます。私たち卒業生は、この差別と闘おうとする炎を、身体を熱くする炎を、今在校生の皆様にとします。」

彼女の答辞が板野中学校の体育館に響き渡りました。震えました。この思いをぐっと受け止め、それ以後ずっと板野中学校の全体学習の礎となった答辞でした。いろんな思いを噛みしめながら、それ以後の人生があったと思います。当時のことにも触れながら、思いを語っていただきます。Bさんです。拍手をお願いします。

《パネリスト B》

(立ち上がり、ニコニコと元気よく)Bです。よろしく申し上げます。私は26年前に板野中学校を卒業しました。今日は今までの自分を振り返りながらお話させていただこうと思います。

中学生の頃を思い出してみました。私の中での同和教育、板中での全体学習はやっぱり好きな人の存在が大きかったです。今、私は別の人と結婚しているので、あまり思い出すのも複雑な気持ちですが、あの時は彼と結婚するって思っていました。「好きな人と結婚する。自分の親に反対されたくない。」それが私の原点です。

でも、大人になって、あの頃を冷静に振り返ってみて、私の言動は彼を傷つけることだったんじゃないか。全体学習で発言すること、高校で同和教育に取り組むこと、あの頃は自分にできることをしていたつもりだけど、彼にとったらどうだったんだろう。今、聞いてみたいです。

(精一杯の思いを込めて)私は今高校3年生と小学4年生の娘がいます。高3の娘を妊娠した時、私は社会人、主人は学生でした。妊娠がわかり、結婚しようということになりましたが、相手の親に反対されました。子どもをあきらめるように言われ、まさかと思いました。自分の親に反対されることはあっても、相手の親に反対されることは考えたこともなかった。相手の家は大きな家です。学生ということもあったとは思いますが、反対の理由はそれだけではなかったと思います。

(笑顔で)相手の親に反対されていることを父親に言ったら、父が私に言ってくれました。

「姉ちゃんのしたいようにしな。どんなことがあっても、お父さんは姉ちゃんが決めたことを応援するし協力するけん。」

その時に、「お父さんは、私が好きになった人ならどんな人であっても絶対反対やせんのじゃ。そんなお父さんになってくれとったんじゃ。」って思いました。だから、強く生きていこうと思いました。反対されても、認めてくれなくっても、親が私を大切にしてくれているように、私も子どもを守ろうと決めて主人と話し合い、結婚をしました。

今ではそんなことはなかったかのように、主人の親も私や娘を大切にしてくれています。でも肩身が狭い思いをすることもあります。そんな気持ちになる自分が情けなく思うこともあります。部落差別だけじゃな

く、親のこと、仕事のこと、経済的なこと、病気や障がい。自分ではどうすることもできない状況は誰でもあると思います。

(当時に思いをはせながら)全体学習で何を学んだのか。自分にとって全体学習はなんだったのかって考えたら、家族や友だち、自分を大切に思えるようになったことかなと思います。人を大切に思えるようになった。命を大切に思えるようになった。そのために強い自分になれたと思います。

(一言一言を丁寧に)今、私は高齢者の介護の仕事や、介護の研修の講師をしています。(特別支援学校の)みなと高等学園で子どもたちに介護の授業もさせてもらっています。この子たちが自分で生きていける世の中にしたい。高齢者が最後まで自分らしく生きていけるような世の中にしたい。そんなことを思いながら仕事をしています。

私が仕事をする中で、職員間でも意見があわないなと感じることがよくあります。徳島商業高校の(恩師である)岡本顕史郎先生が書かれた「Y子は獅子になった」の資料の中に、岡本先生が新しい学校へ赴任される時に、校長先生に言われた「どちらを向いて仕事をすればよいのでしょうか。」という言葉があります。

「生徒の方を向いて仕事をすればいいのか。それとも学校の方を向いて仕事をすべきなのでしょうか。」

私はこの「Y子は獅子になった」を中学生の時に全体学習で学習しました。正直、内容も最近まではっきり思い出せませんでした。でも、先日読み返してみて、岡本先生の言葉が、今の私の中に生きていたんだと気づきました。当たり前のことですが、私は目の前の人を見て仕事をしています。人が一番大切だから、命が一番大切だから…。それだけは絶対譲れない。それが良いか、悪いかの判断基準になっています。そういうふうに見えるようになったのは、岡本先生の気持ちが私にずっと残っているからなんだと思います。

(一言一言を噛みしめながら)卒業して、大人になって正直全体学習のことを思い出すことはあまりなくて、自分の人生にどれだけの影響力があったかなんて考えたこともなかったけど、またこうやって人権について考える中で、私って、あの時の全体学習や先生の言葉や、仲間の気持ちでできていたんだなあと思います。あの頃、当たり前だった同和教育や全体学習、高校でも支えてくれた先生が居られました。

今でもこうやって先生方や仲間とつながれることは本当に幸せなことです。でも、娘をみるとそうじゃないと感じます。私は娘と部落差別についてじっくり話をしたことはないです。高校で人権作文を書くことがあっても、娘は部落差別については書きません。身近に部落差別を感じていないんだろうと思います。もうすぐ、巣立っていく娘に私は何を教えてこれたんだろう。親しか教えられないこと、先生から学ぶこと、友たちから学ぶこと、それぞれ違うと思うんです。当たり障りのない人権教育。娘が大人になって、道徳の授業が娘にどれだけ残るんだろう。娘が大人になって、それでも大切に思ってくれる先生がどれだけいるんだろう。学校の方を向くのではなく、生徒の方を向いている先生がどれだけいるんだろう。子どもと人権について話ができる親はどれだけいるんだろうと思います。

私は中学、高校時代、両親と自分から同和問題についてこう思うということは積極的に話しなかったと思います。いろんな会に参加したり、活動することに対して親に特に反対されるわけではなく、応援されることもなく過ごしてきました。

(しみじみと)先日実家に帰った時に、私が今度このフォーラムで話をすると、母が「峠を越えて」(板野中学校の同和教育実践集)や中学や高校で使っていた資料を出してくれました。20年以上前の資料は色あせて茶色になっていました。母は私には何も言わないけど、ちゃんと私の思いをわかってくれている。私のこと、板中のこと、全体学習のこと、先生のこと、同和教育を大切に思ってくれている。とてもうれしかったです。

差別をなくすことは難しいかも知れません。でも、自分に関わる人の意識を変えることはできる。思いを持ち続けることだったり、気持ちを、本音を伝えることだったり、人との関わりの中で差別は少しずつなくしていけると思います。

日々の生活の中で、部落差別について考えることは正直あまりありません。でも、たまに、「あの人は部落だから」というようなことを聞くことがあります。そんな時、「ほなけん、何？」って思います。それ以上の感情が今の私にはないです。部落出身だろうとなかろうと、もっと個人としてみていこう。いい人もいるし、悪い人もいる。「部落出身だから、障がい者だから、ほなけん何？」と思います。無関心なわけではないのですが、今の私はそういうふうにするだけです。昔はもっといろいろな気持ちがあったと思います。自分が変わりたい。親を変えたい。友たちを支えたい。差別をなくしたい。友たちのために、あの人のために。今思うと、何様やって思っただけで恥ずかしくなります。でも、全体学習があったから、今の私がいます。

(生き生きと)今、10代～60代と年代は違いますが、介護の授業を通して、人権について講義をさせていただく機会があります。部落差別、障害者差別、国籍、いろいろあるけど、もっと人間の本質というか、一人ひとりの生き方を大事に思えるような人になりたいし、娘たちにもそれだけは伝えていきます。

私は今年41歳です。人生折り返しで、自分を見つめ直す機会を今日いただいて本当にありがたく思います。先日、中学生交流集会の実行委員会に参加させていただいてお話させていただきました。帰る途中の板野中学校の生徒さんが「今日はお話してくださってありがとうございました。」と言ってくれました。なかなか言えませんよね。初対面の大人がしゃべったことに、「ありがとう」って。泣きそうになりました。

卒業して26年。卒業式の答辞で語ったように、あの時の私たちの思いを受け継いでくれている子どもたちがいます。人権の学習って、人とつながり、人を大切に思えるようになることだと思います。これから、40歳の自分に何ができるのかと考えたら、それは、こうやって、人とつながり、思いを語り、自分を振り返りながら、前に進んでいくことかなと思います。

(笑顔いっぱい)そして、これだけは皆さんに伝えたいと思うことがあります。私は、板野中学校で全体学習で学んだからこそ今の私があるし、今、私はすごく幸せです。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

(うれしそうに)26年前、板野中学校の体育館でマイクを持って語った、その時の言葉とかぶってくるんですね。自分の言葉で自分のことを言う。当時は14歳や15歳です。14年、15年生きてきて、こんなことは友だちや先生に絶対に言うことはないと思っていたことが、言いたくて言いたくてたまらん、そんな思いにしていく。その言葉を必死で聴いて返してくれる。そこに深い深い絆が生まれてきました。その場面がまさに学校の本質だということを強く思います。

このフォーラムもそうなんです。後半いろんな立場の方がマイクを握って、ご自身のこと、仲間のこと、家族のこと、それを言葉にしていきます。その自分の言葉が自分自身を癒していきます。仲間を癒していきます。自分に何ができるかを問い続けていく、そんな日常をつくり続けていきたいなと思います。

『峠を越えて』という実践記録を板野中学校で10冊余りまとめてきました。(一冊の本をかざしながら)ちょうど彼女が3年生だった1992年度の『峠を越えて～輝ける日々～』という実践記録です。この表紙に、本日資料としてお手元に配らせていただいた「Y子は獅子になった」の親子獅子の色紙を表紙につけさせていただきました。

この実践記録の中には、「Y子は獅子になった」の資料も入っています。その資料をもとに取り組んだ全体学習の記録も入っています。当時の中学生の語りは新鮮です。

「同和対策事業特別措置法」のなかった時代。「同和対策審議会答申」は出されていたけど、部落差別が当たり前だった時代です。部落差別があっても抗議することすらなかった時代です。

(切々と)この獅子の絵を描いたY子さん。彼女は高校3年の時、10名の仲間と京都の高島屋デパートの入社試験を受けています。一緒に試験を受けた10名の仲間のうち、本当に優秀だった彼女1人が入社試験に落ちています。入社試験の日、彼女は、その彼女がいた高校の先生をしておられた岡本頭四郎先生の所にやっ

てきて、「先生、私は不採用です」と言います。「そんなことはない。どうしてそう思うのか？」岡本先生はY子に訊ねます。Y子は、わかるんです。

入社試験の面接で、面接官の前に10名が並びます。面接官は、一人ひとりに自分の本籍地を言わせるんです。Y子が口にしたのは、1時間近い面接の中で自分の本籍地だけなんです。Y子に対して面接官からの質問がまったく来ないんです。その意味が彼女にはわかります。そして、比叡山高校から受験した10名の中で、彼女1人が不採用です。一番優秀な彼女1人が不採用です。

でも、学校がそれを問題にすることはなかったです。皆さん、「月桂冠」という日本酒を造っている大倉酒造。その「大倉酒造就職差別事件」（1962年）という部落差別事件のことを大学時代に学んだことがあります。

（力を込めて）当時、とても優秀な高校生が大倉酒造に入社試験を受けました。不採用になっておかしいということになって学校が大倉酒造に問い合わせしました。大倉酒造の当時の人事担当者が、何の抵抗もなく、「あの子はいい子だったしトップの成績だった。しかし、うちの会社は部落の人間と在日の人間は採用しないということを内規で決めているんです。」そう、何の抵抗もなくそんなことを言う時代があったんです。それが大変な差別であるということを会社や事業所にわからせ、差別をなくしてきたんです。

その思いを当時の板野中学校の子どもたちは受け継ぐように、そのことを語りあった全体学習がありました。授業記録を読み返すと、その時の子どもたちの語りがよみがえってくるんです。実は、彼女は、板野中学校を卒業し、徳島商業高校へ進学しました。そこで出会った岡本顕四郎先生に、彼女が今日ここで話をするようになって、久しぶりに連絡しようかということになりました。連絡したら、先ほど佐藤芳子先生の話しをしましたが、岡本顕史郎先生も身体を悪くされ、昨年5月12日に亡くなられていました。

（精一杯の思いを込めて）力が抜けていきます。あれだけ大事にしてくれた先生、あれだけ励ましてくれた先生。板野中学校の全体学習に何度も顔を出していただいて、マイクを握って語っていただいた。私も、幾度か徳島商業高校の職員研修や子どもたちに講演に行かせていただくこともありました。そういうつながりを大事にしてきました。

このY子さんが描かれたこの色紙の絵を、たまたま私が岡本先生の（同志社）大学の後輩ということもあって、君にこの色紙を託すから持っていてくれということで、預かってきたんです。この額に入っているのがこれが色紙の現物です。休憩の時に後ろに置きますのでまた見てください。

この絵は、「狩野永徳の『唐獅子図屏風絵』（皇室所有）」が元になっています。この絵に思いを込めて、Y子さんは色紙に描き、岡本先生に贈ったんです。同和教育、人権教育の絆というのはやっぱりすごいです。岡本先生は、この絵に込められたY子さんの思いを受け止め、「Y子は獅子になった」という作品にまとめられ、その文章を徳島商業高校の文芸誌「すみよし」に投稿されました。その「すみよし」（37号）に掲載された作品を資料にしてきました。

私がY子さんに会いたいとお願いしたら、今、（滋賀県の）大津市にいますから会いに行きましょうということで、仲間の教師と共に会いに行くわけです。本日の資料の裏に、そのY子さんにお会いした時の写真を載せています。私たちがY子さんに出会えた、岡本先生がY子さんと再会された、その時の岡本先生の笑顔が昨日のこのようによみがえってきます。

部落差別があるということは切ないです。悔しいです。しかし、それを解決していくということは誇りです。よろこびです。そういうものをきっちり私たち自身のものにしていく。そういう学びを積み上げていきたいと思います。

（気持ちを切り替えるように）板野中学校で私は13年席を置かせていただきました。教員生活で初めて中学1年生を担当した、その時の生徒がこの後語ってくれるC君たちです。今回、お父さん、お母さんもこの会場においでいただいています。本当にすごいことです。（人権の会に）来てくれと声をかける親子の関係。声

をかけたらここに来てくれる親子の関係。彼が中学1年生の時、初めての家庭訪問で、彼とお母ちゃんとおばあちゃんが私を迎えてくれました。その時に、この子は家族の深い深い愛情の中で育っていったんだと実感しました。人間は深い愛情があふれる支えの中で、本当にまっすぐ育っていくんだと思いました。

彼と過ごした3年間というのは、教師になって初めて、中学1年、2年、3年と持ち上がった学年です。同級生もこの会場に来ています。部落問題を解決していく学びというのは、私たちの人生を本当に豊かなものにしていきます。そういうものをつかんだことというのを彼は何度も語ってくれていますが、そのたびに笑顔と涙と感動と、すべてを加味して語ってくれると思います。ハードルを高くしました。すみません。それではC君です。よろしくお願いします。拍手をお願いします。(拍手)

《パネリスト C》

Cです。今、僕は養子に行っていて、昔はTという名前が出ていました。今はCでやっています。今A先生が言われたように、感情の浮き沈みが激しいので、うまく伝えられるかわかりませんが、よろしくお願いします。

会場に来て、まず一番に気になったのは、今日って、Y先生来ているのかなということ。昨日からこの会場に来ているのかな、どうなんかなということをずっと思っていて、話す時に、Y先生の態度を含めた反応がすごく気になっていて、気にせずに言っているつもりなんです、なぜか気になって、今日は来っていないなちょっと安心していたんですが、一番後ろにいました。(会場に明るい笑い)さっき見つけました。

今日は本題に入る前に紹介したい仲間がいます。(会場に手をかざしながら、立つように促し、3人の男性が立ち上がったところで)今朝、愛知県の(名古屋市の東側にある)豊明市から駆けつけて来てくれました。後ろにも顔を見せてください。よっ君と良太がこの場に来てくれました。(もう1人の男性の困った様子を見て)あ、ヒロシ、ごめん。ヒロシと3人でできてくれました。(会場全体に明るい笑い)なぜ、彼らがここに

来てくれているのかということを追いかけて話そうと思います。ありがとうございました。(拍手の中、3人の着席を促す。3人の着席を確かめて)僕は、板野町出身で、板野東小学校というところで育ってきました。「学習会」というところに参加して、小学校当時は、「ただで勉強を教えてくれる。学校の先生が来て教えてくれる。お金もかからんし」という感覚で小学校生活を終えました。

板野中学校に入って、A先生が1年生の担任で、入学当時から怒られることも結構あって、男の担任の先生というのは初めてで、この先生はちょっとちゃんとしとかんとまずいなという感覚の中、同和教育、道徳の授業が進んでいきました。小学生の時にしていた道徳の授業って、かわいそうだなとか、発表する時でも表面上での発表しかなかったんですけど、中学校に入って、A先生が中学校に入学した時から真剣に同和教育について話してくれました。

その中で、中学生も学習会に行っていたんですけど、学習会に行っている子は部落の子なんだと気づかされました。初めて知った時に、ショックとかそういうのはなくて、僕は常に家族が話をしてくれるような環境なので、学習会に行っている子は部落の子なんだということを家族の中でも話をしてくれました。僕は、中学校で学んできたことや友だちのことを家で話をさせてもらって、「Cお前すごいなあ」とか、「カッコええなあ」と誉めてくれたんですけど、そうさせてくれたのが、さっきもA先生が言ってくれたんですけど、親が小さい頃から僕らへの愛があったということかなと思います。それは今も変わらないです。

中学で、同和教育、全体学習をずっと続けてきて、その中でいろんな発表をし、聞いてきたんですけど、僕も、その中でいろんな意見に出会い、いろんな友だちに出会い、今日は、この会場にK(同級生で板野中学校教諭になっている)も来てくれているし、優(同級生で部落解放同盟の青年部長をしている)も久しぶりやな10何年ぶりかな。来てくれている。この2人とも中学校当時からいろんな意見を言い合って、「自分は部落出身です。だからどうで…」という発表を繰り返してきて、お互い励まし合いながら、高校生になって

違うステージに上がった時にも、頑張れる土台というものをこの全体学習が作ってくれたと思います。

そして、そのステージの中で先生も一緒に考えてくれたし、先生は先生で横のつながりができていたと思うし、生徒は生徒で横のつながりができていたと思うし、また生徒と先生の間にもつながりができていたと思うすごくいいことなんです。ただ、最近ではそういう環境というのは、すごく少なくなっているというか、やりにくくなっているみたいなんですけど…。

僕はそんな良い環境の中で育ってきて、部落出身であるということに恥じることなく生きています。大なり小なりいろんな意見や差別にあうこともありました。高校を卒業して19年たちます。今は、(会社で)そこそこのポジションを与えてもらって、今、会社で頑張っているんですけど、その中でも、「エッタはこの箱に触るな」みたいなことを作業箱に書かれてしんどい思いをした時もあるんですけど、自分も部落出身というのはどういうものかということも理解していたので、そこは、耐えていこうということではなく闘っていこうという気持ちだったので、今もそのことを忘れることはないんですけど、会社ではこういうこともあるんだなと思いつながりながら生きています。

結構、自分が部落出身という立場であるということを、会社の中でも最近いい関係になれた人には言うこともあります。最近、(20歳前後の)若い子と一緒に(仕事を)することがあって、一緒に新しい機械を使うことになって、広島と一緒に出張に行って一緒に飲んだんです。

僕は今はCですが、会社の中ではTで通っていて、「Tさん、Tさん」と言ってくるので、普通に言わせているんですけど、その広島出張に一緒に行ったのが22歳で松茂中学校出身です。その子も仕事の中でいろんな悩みがあって、僕に打ち明けてくれます。

僕も、ああだこうだと意見を返して、「22歳の若いお前がいろんな悩みを僕に言ってくれたから、僕もな、中学の時から、お前、同和教育って知ってるか。僕も部落出身でそういう学習をしていたんだけどな。」とさらっとした感じで話をしたんですが、なぜか、その話がさらっと終わってしまうんです。おそらく、同和教育問題という言葉にピンと来ていない。部落問題という言葉にピンと来ていないんです。

知っているのか知らないのか、僕は、僕の言ったことに食いついてきて、「僕も知っていますよ。僕(その学習を)しましたよ」と言ってくれると思っていたんですが、さらっと終わってしまって、何かこう寂しかったというか。まあ、もう一回りベンジして聞いてみようかなと思っています。

さっきも言いましたが、会社でも良いつながりをつくるためには、自分から自分のしんどいもの、抱え込んでいるものを言うことが、コミュニケーションになったり、理解できないことがあるかもしれないけど、言わなければ理解されることもないだろうし、まず、発信する対話するということは常に考えています。

(少し言葉を捜しながら)5年位前、僕の上の娘が生まれた頃、近所の小さな居酒屋に飲みに行っていました。そこに1人男性が座っていました。僕は奥さんの妹と飲みに行っていたんですけど、僕は1人で飲んでいる人を酔うと、ほっとかんのですね。(身振り手振りを加えながら)やっぱり巻き込みたいというか、1人より2人のほうがお酒も絶対美味しいと思うし、声をかけました。それが(愛知県から来てくれた)3人の真ん中に座っている良太です。

その時は、超盛り上がり何の話をしたのかもわからないくらいだったんですけど、でも、こいつは滅茶苦茶大事な存在だなと思って、それから夜中までずっと一緒に、最初に言ったのか、次の時に言ったのか、僕も自分の(部落出身という)立場のことを彼に打ち明けました。(その時の情景が浮かび思いがあふれ、言葉に詰まる)なんでCが部落差別にあわないかんのや。関係ないやろ。そう、良太が泣きながら言ってくれた。(胸がいっぱいになるのを必死で押さえながら)別に出会わなくてもよかった二人なんですけど、二人とも出会ってしまった以上、大事にするという方が大切な気持ちになりました。仲間意識が高いので…。

そういう話をしていたら、今度は地元に戻って、良太が自分の気持ちを自分の地元の仲間に伝えて、電話でやり取りもして、地元でもいろんなところで話してくれていたと思うんですけど、翌年徳島に来たら、1人

だったのが5人になって、多い時にはバス1台20人くらいで(徳島へ)来た時もありました。

その時も全力で、僕も自分の意見を言うし、来てくれた方も言うてくれるし、でも、そういう関わらなくてもいい関係を築かさせてくれたというのは、全体学習という中で、自分の意見を言わせてもらい、自分の意見を考え、自分が部落出身であるということを語り合う関係が根底にあったからこそ、つながりを続けていけていたんだろうなとすごく思います。

(一言一言を自分なりに確認しながら)昔よく言っていました。部落差別をなくすという発言をよくしていました。それはもちろん部落差別をなくすつもりです。でも、最近よく思うのは、部落差別をなくすということが正解かなと考えた時に、ちょっと考えてしまう自分がいます。

部落差別が問題なわけではなくて、自分を取り巻く環境の何かが問題なわけであって、そこに障害者差別であったり、在日の問題であったり、いろんな問題があります。そこと向き合うために、部落差別、部落問題を通じて僕たちは育ってきているんだと思うし、結果、部落差別がなくなるといいんですけど、いろんな周りにある問題に目を向けずに、ストレートにいて、そこで「イエス」か「ノー」か、ちゃんと判断を下せるかどうかということもあります。

T(同級生で鳴門金時の農業経営をし、毎回フォーラムに参加し思いを語っている)、名前は聞いたことがあると思います。面倒くさいので説明はしないんですが、彼とそういう話をよくします。中学時代、いつも隣同士で、語り合ってきて、意見を発表したりさせてもらうんですけど、今日、Tは仕事が農業なので、今日、農業の方で青年の意見発表(平成30年度JA青年の主張・JA青年組織活動発表大会徳島大会に自分の組織を代表して参加している)をしています。

僕は、僕と同じステージだと思っています。彼が発表する文面を僕にもメールで送ってきてくれました。短い文なんですけど、ちょっと紹介させていただきます。

それは(JAの)上の組織や上の人たちに対し、「互いに今以上に仕事(農業)によるこびを感じ、取り組む環境の効率と、(一人一人の)よりよいコミュニケーション能力を地域や組織で高め合うことが大切である」と訴えた文章です。おそらく普通に農業だけしていたら、こんな人を巻き込むような意見は言えないと思います。彼も、全体学習で人として強くなって、同和問題とか全然関係のないところで住んでいるんですけど、自分の中ではきっと自分をさらけ出していると思うんです。今日もここに来る前に電話して、「お互い頑張ろうな」という話をして、ちょっと安心してここに入ったんです。(T君は、この日JA青年の主張発表大会で最優秀賞を取り、徳島県代表として、島根県において中・四国大会で意見発表をするようになる)

それと、さっきA先生も紹介してくれたんですけど、(少し照れくさそうに語り始める中、会場に温かい空気に包まれる)この会場に親も来ています。こういう場に親が来るのは、初めてかなと思います。話を振らんでくれよという顔をしています。

温かい家庭で、小学校の頃から、陸上とか、サッカー、中学校、高校でも、誰かに見せる、表現するということをしています。陸上にしても、サッカーにしても、自分との闘いで、誰かに見せるということをしています。その時に絶対親が来ました。朝一番に会場入りして、応援してくれて、僕より先に帰って、(僕の)顔を見たら終わりという。何気ない普通の一家庭の様子なんですけど、それがありがたいなと思います。僕に何も心配させず、考えさせずに育っていく環境というのを僕につくってくれたなと思い、それをありがたいなと思います。

(精一杯の思いを込めて)僕は今結婚して、養子に入って、板野町を離れて徳島市内に住んでいるんですけど、養子に行くとなったら、僕の奥さんの親も、実家にも帰れよと言ってくれるんですけど、なかなか帰りづらい。帰って親に顔を見せてやれよと言ってくれるんですけど、僕も、軽い気持ちで養子に行ったわけではないので、ある程度腹をくくって行ったのでなかなか帰りません。たぶん、僕が1人で帰っても、奥さんを連れて帰っても、子どもと帰っても、よろこんでくれて、こっちに帰る時にも、僕の車が見えなくなるま

で手を振ってくれるんです。バカ親と言うか、家の中にいたら片付けもできると思うんですが、ずっと見送ってくれます。

(生き生きと)親のような親になれるかと言われたら、正直自信はないんですけど、自分も一つの家庭を持っていて、自分の親ができてきてくれていたことを自分の家庭の中でもしていこうと思います。誰でも何かをしてくれたら「ありがとう」、頼む時には「お願いします」。そういうことをしっかり教えてくれました。

それが仕事でも、今、後輩を育てていく立場なんですけど、後輩でも、年下でも、「今日は一緒に仕事をしてくれてありがとう」と僕は絶対言います。一緒に何かする。一緒に考える。それがすごく大事なことで、コミュニケーションになって、つながれて、たぶん大きなものになって返ってくると思っています。そんなやり方が間違いないと思っています。優しくいくことで損をすることもあるんですけど、自分に正直になって突き進むことで損をすることはないと思っています。

僕はこの部落差別についても、たぶん中学校や高校の全体学習や授業で、意見発表をし合っていた時よりも、今の方がいろいろしっかり考えられて、冷静に判断できると思います。人との行動やつながりができていかなと思います。常にそういうことを考えて、考えるだけなら面白くないので、いつも会ったり話す仲間、久しぶりに会う仲間と話したりとか、愛知県から来てくれる仲間と話したりとか、こういうことを大事にしていきたいと思います。

そうさせてくれたのは、当時の先生が本気になって子どもと向き合ってくれたことが一番のことなのかなと思います。先生といろいろやらせていただいた節目かなと思って、今日はこのステージに立たせてもらいました。(笑顔で)文章とか書かなくて思い浮かんだことを話してしまうので、ちゃんと伝わったかはわからないんですけど、どういうふうに関めようかとわからなくなってしまって、…8月の下旬に中学生集会があります。ねえ、Y先生。(会場から拍手が起こるなか元気よく)中学生も頑張っています。大人も大人で逃げるわけには行かないので、頑張りましょう。(拍手)

《コーディネーター A》

彼は、さらっと話をするんですけど、私も、清水の舞台から飛び降りるような思いを持って自分の立場を伝えた時に、「それがどうしたん？」と聞き流される。その時に力が抜ける。やはり、共感がない関係というのは、こんなものかと思ってしまう。でも、聞いてくれて、感じてくれて、返してくれる仲間と出会った時に、人と人とのつながりっていいなあと思うんです。

そういう仲間をどれだけ持っているかということが問われていきます。そういうつながりをつくるために人権の学びを「わがこと」として学んでいくなと思います。例えば、JAの青年の意見発表大会で、10分以内という枠で意見発表をしているT君ですが、実は、昨日彼の家にお邪魔して楽しい時間を過ごしていました。その時、明日の意見発表大会の練習をしようということになって、私と一緒に訪ねた神奈川県(毎年フォーラムに参加している神奈川県元中学校長であるN先生)の前で、意見発表の原稿を読んでもらったんです。その意見発表を奥さんと、小学校3年と小学校1年の二人の娘さんが一生懸命聴いているんです。本当に素敵な光景です。本当に幸せな時間です。家族の絆とはそんな心と心の通い合いの中で生まれていくんだと思います。

彼は鳴門金時の農家です。そこは彼のお母さんの実家なんですけど、(力を込めて)お母さんのものすごい結婚差別があったんです。家族の絶対に部落の人間と結婚させるなという中で、彼のお母さんが出会ったのが部落の青年です。彼のお父さんです。彼のお母さんは隔離されて、そこから抜け出して駆け落ちをしているんです。そして、T君が生まれて、やっと今のよいよい関係ができました。

私は、T君を中学1年で担任するんですけど、最初に書いてきた文章が、鳴門金時の収穫の手伝いに行った時に、パートさんが働きに来ている。そのパートさんが結婚差別のことを知っていますから、それを面白

がってかもわからん、いや、悪意がないかもわからん。聞かれるんです。「T君は、どこの学校に行っているの」と。板野南小学校と彼は言いたいんです。それで、「板野南小学校です」と言いかけたら、おじいちゃんが言わせないんです。おじいちゃんが「藍住の学校に行っている」と言うんです。

(ほとぼしるように)それが部落差別であるということを彼は小学校6年生なりにわかっているんです。その切ない思いを生活ノートに綴ってきたんです。全体学習で訴えてきたんです。それに仲間が返してきたんです。そのことを「わがこと」として考えていく集団。そういう関係が求められてきているんです。

T君は中学3年の時、母の日に家で友だちや兄妹と、家でカレーライスを作っている時に、電話がかかってくるんです。そして、名前も名乗らん大人に突然「お前の家は部落か。同和地区か。」と言われるんです。彼はその時、「どうしてそんなことを聞くんですか？」と訴えた。それが大変な差別であると伝えようとする。そのとき、その名前も名乗らん大人は、「お前の家は、エッタか」と聞くんです。私は、社会科の教師です。土農工商えた非人とは教えていますが、小さい「ッ」がつく言葉は教えていません。その「エッタ」という言葉が突き刺さってくるんです。力が抜けるんです。親にこのことは絶対に言うまいと思うんです。その苦しんで苦しんでいた時に、ここにいるC君のところに電話をかけるんです。その1本の電話で救われるんです。それが仲間です。そういう関係をつくるのがこの学習だと思うんです。

C君も今軽く言いましたけど、実は、7年前(2011年度鳴門市人権地域フォーラム)に、この会場で、会社名を出してこのことを報告しているんです。その職場で、彼の使っている道具箱に賤称語を書かれるんです。「エッタさわるな」と書かれていて、私はその現物を見せられた時に震えました。同年代の子が書いているんです。その子が受けてきた同和教育って何なんだと思うんです。この現実は何なんだと思うんです。

でも、C君はその子にもきちんと話をして関係をつくるんです。ギクシャクしたものはあると思います。それを乗り越えていける、そういう関係をつくっていく。それが私たちに問われている同和教育であり、人権教育だと思うんです。「ひとごと」として考えたら何も思いません。そうじゃなくて、自分に何ができるかです。自分の思いを返していくということです。それが人間を人間として生きたものにしていくし、その営みというのは、10年経っても、20年経っても、30年経っても、40年、50年経っても、その教室が、その場面が、その言葉が昨日のここのように鮮やかによみがえってくるんです。そういう部落問題の学習を、人権の学習を積み上げていきたいと思えます。

そういう取り組みが西日本各地に広がっていきました。今年23回を迎える中学生集会ですが、先週開催予定でしたが、台風のため延期になって8月18日に行われます。松茂中学校の生徒が7名、実行委員長など運営に関わってくれています。延期となった時に、中止だと思ったのに、延期と聞いて本当によろこびました。「できる」と…。そういう思いを持った中学生が育っていています。そんな学びが全国各地に広がっていく。どの学校においても、中学生が、子どもたちが、本当に自分の言葉で、自分のことが安心して言える。そんな関係が広がっていったら、学校のいろんな問題が見事に解決していく。信頼が生まれていくんだと思えます。

(ニコニコと)先ほどから、Y先生、Y先生と名前が出ていますが、これからY先生の教え子が語ってくれますので、しっかり聞いてください。それでは、板野中学校の全体学習が他の学校へ広がっていった、その一つとなったY学級の卒業生です。Dさん、お願いします。拍手をお願いします。(拍手)

《パネリスト D》

応神中学校出身のDと申します。よろしく申し上げます。私は、大学は高知県の大学へ行って、今年の4月に徳島へ帰って来て、養護教員として先月までは地元の応神小学校に勤めさせてもらって、この8月から鳴門西小学校へ勤めさせてもらっています。

(はにかむような優しい笑顔の中で)私がおがままで臨時教員というのが嫌だったので、今日のパンフレッ

トに応神中学校卒業生と書いていただきました。このお話をいただいたのは、去年の中学生集会で同級生とお話をさせてもらって、その流れで今回のお話をいただいたのだと思っています。私はメールの返信もできませんし、本当にルーズな性格で、A先生が私のところにおいでくださったりしてありがたいし、申し訳なさでいっぱいです。他のパネリストさんのような深いお話しも私はできないんですが、私のお話をさせていただきます。

私は応神中学校を卒業して7年経ちます。私はずっと自分が同和地区出身とお話してきたんですが、私は、実家が八百屋をしていて、お店は同和地区にあるんですが、家は部落ではない地域にあるんです。でも、小学校とか中学校で地区別対抗リレーとか、地域で何かをするという時には同和地区の中に所属していたんです。それもあって、自分は部落出身だと思ってきたんですが、よくよく考えてみると、ちょっと違うかなという感じもしてきているんですが、所属が同和地区だったので、運動会や親子遠足や、地域で何かをする時はそこでやっていたんです。

その時に、こういうパネリストの立場で言うのもなんですが、性格が合わない、そりが合わないというか、私はドンくさかったんで、その子たちのずばりと言う言い方についていけない。何をするのもその地区とやりたくないというのが自分の中にあるんで、私はずっと他の地域に行きたいと思っていました。家は同和地区じゃないところにあるのに、なぜ私は同和地区でやっていかなければならないんだろうという気持ちが小学校の頃からあって、ある時、母に愚痴みたいに「私は同和地区じゃないのに、何をするのも同和地区と一緒に、何で私がそこでやっていかないけんの？」みたいなことを言った時に、母は、私が部落のことを聞いているように思ったみたいで、その時に、父が部落地区出身で結婚差別にあったという話を泣きながらしてくれました。

その時、私は小学校だったから、人権学習もしていなかったし、同和地区とか出身ということがよくわかっていませんでしたが、「なんかよくわからんけど、ここでやっていかないかのやな。お母さんも泣いているし」という感じでさらっと過ごして中学校に進学しました。

中学校で、「あの時お母さんが泣いていたのは、こういうことだったんだ」というふうに学びました。話がうまくまとまらないんですが、(言葉を捜しながら)私の父の話になるんですが、私の父は、生まれて1週間もしないうちに母親を亡くして、中学1年の時に父親を亡くしました。中学1年生で両親を亡くしたということがどれほど大変だったのかなとか、その後、祖父母に預けられて育ってきたと聞いたので、苦労が計り知れないなと思います。

父は、大学に行きたかったそうなんですけど、お金の関係があって反対されて行けなかったという話を聞きました。そして、結婚という自分の幸せがつかみかけた時に結婚差別にあったという悲しみとかは、私には計り知れないんですけど、そういう話を母から聞いていたので、中学校での全体学習の際に、みんなが「差別をなくすぞ」とか、「悪口は言わない」とか言っているのが「ひとごと」のように聞こえて、自分の父親のことが浮かんで、泣きながら「本当にそう思っているの？」と訊いた記憶があります。

もちろん悪口は言うてはだめだし、差別はいけないんですが、あまりに正論過ぎて、私のかんに障って「本当にそう思っているの？」と泣いてしまいました。今日は来ていないんですけど、仲のよかった女の子が「大変だったんやな」と言って、授業の終わった時に一緒に泣いてくれて、私は良い友だちを持ったなと思いました。

(原稿を確かめながら)そういう、自分が本当に泣いてしまった時に、温かく言葉をかけてくれる友だちの存在がすごく大きくて、その子が中学校を卒業して高校生の時に、友だちの話なんですけど、あれだけ人権学習のことを学んできたけど、高校で付き合った人がいて、その人が地区出身だということを両親に話したら、付き合うのはいいけど、結婚まで応援できないということを言われたそうで、電話をかけていろんな話をしている時にさらっと言ってくれたんです。

その話を聞いた時に、その子があれだけ中学校の時にいろいろやってきたのになあと行ってくれたんですけど、言葉をうまく返せなかったし、ショックというよりも、現実ってそんなものだと私もサラッと思ったんですけど、去年も中学生集会に出させてもらったりしながら、その時のことを思い出していて、今、その子はあの時どういう気持ちで言ってくれたのかなと考えたり、もうちょっと声をかけてあげたらよかったなとか考えています。

今も仲はいいんですけど、黙っておけば当たり障りのない人間関係を続けられたのに、何で言ってくれたのかなと思う時に、きっと真っ直ぐな子なので、そういうこともあって行ってくれたんだなと思っています。すごい勇気を振り絞って行ってくれたんだなと思います。

中学生の時の人権学習を通して、今思うことっていうのは、私は人権学習を通して、人を知ろうとする力につながっていると思います。(恥ずかしそうに)去年の中学生集会で言った言葉のそのままなんですけど、私は当時看護学生だったので、言っていることと、感じていることが違っていたりして、中学生の時の人権学習でも、同じ地区のちょっと言い方がきつめの子とかも、自分のお母さんのことで悩んでいて泣いていたりして、「この子ってすごいな。こんなことで悩んだりしとったのか」と思って、人って裏でどういうふうにいるかわからないものだったんです。

そういう体験もあり、看護学生の時に、わからなくてもいいし、声をかけられなくてもいいから、その人のそばにいて、何とかその人を知ろうとする力につながっていたんじゃないかなと思います。私は今、養護の助教諭として勤めているんですけど、その時に、保健室に遊びに来た子などがいて、適当に話を聞いていたんですけど、よくよく他の子から話を聞くと、その子は、親とか友だち関係で悩んだりして、あれだけ来ていたのに全然わからなかったと思って、こういうことももっと勉強しなければ、力が足りんなど思ったんですけど、中学校の時のみんなでやった人権学習は、今も心に残っているもので、当たり障りのないマニュアル通りの授業だと全然残ってなくて、本音で語り合うからずっと心に残っているのかなと思います。

でも、本音で語り合うというのは、マニュアルもないし、台本もないし、どうなるかわからないし、自分がいざやるとしても怖いんですけど、あの時の授業があったから今の私があると思います。以上です。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございました。この後休憩を取らせていただきます。10分間休憩を取らせていただいて、後半の冒頭に、昨年度パネリストとしておいでいただいた広島大学名誉教授の原田彰先生に、この会場においていただいています。(1冊の本を持ち上げながら)この本を書かれた先生です。今日受付で配っていただいた中に資料も入れていただいています。資料のことについて、またどうしてこの本を書いたのかという思いを語っていただきます。

その後、今パネリストの言葉にもありましたが、皆さん自身が自分の言葉で、自分に何ができるかということ言葉をしていくということ、文章にしていくということが本当に大きなことだと思います。やっぱり現実に人権課題に直面したとき、私たちの意識は、まだまだ「ひとごと」です。「それがどうしたん？」と言われた時の切ない思いというのが、なかなか創造できません。わからないんです。その人の痛みというのは…。でも、そのことをわかろうとする時に深い深い絆が生まれていくんだと思います。

自分に何ができるかということ、無関心であるということの切なさというものを後半、皆さんの言葉を通して考えていきたいと思っています。それでは10分休憩を取らせていただきます。一生懸命聞いていただいて、力をいただきながら話をさせていただきました。3人のパネリストへ拍手をお願いします。(拍手)

前半終了

=意見交換=

《コーディネーター A》

時間になりました。後半を始めます。(「差別・被差別を超える人権教育」の冊子を手に取り会場に示しながら)原田先生の書かれた「差別・被差別を超える人権教育」、これは1990年と1991年2年間の板野中学校での実践です。

(一言一言をじっくりと)その中で、先ほどもC君から話がありましたが、同和地区の子が自分の立場を知る。そして揺れる。その思いを当時の生徒たちが授業を通して吐き出していきました。そのことに関して、地区外の子どもたちがそれを自分の問題として受け止め、自分に何ができるんだろうという返しをしています。それがこの(1990年と1991年の)2年間の学びの深まりだったと思います。

同和地区に生まれた子の思いだけではなくて、同和地区に生まれていない私に何ができるんだろうか。何が問われているんだろうか。その子自身の人間関係だったり、友だちとのことだったり、その自分自身の言葉で語っていくというその作業が深い深い絆をつくっていきます。その子どもたちの言葉の一つ一つを原田先生が分析してくださいました。

この冊子の中に、10回以上の私の授業記録が取り上げられているんですが、もう27年も前のことですからまったく覚えていない授業もあるんです。

水平社運動の授業で、ある生徒が私にくっついてかかってきました。融和運動ことを話した私の語りにくっついてかかってきました。その生徒とのやり取りが記録に残っています。その授業のことを私は忘れていました。しかし、その時の記録を読み返す時に、執拗に私に迫ってきた。噛みついてきた。訴えてきた。そして、また別の授業の時に、その時のことを返してきた。その授業の場面がやっぱりよみがえってきます。

自分のこととして、自分の問題として、自分の言葉で返してくれた子どもたちに、私はずっと心を打たれてきたし、励まされてきたし、支えられてきました。そういう授業の一つ一つを言葉の分析をしていただいた原田先生に、どうしてこの本を書いていたのか、そして、今日も「喪失から再生へ」という資料も持って来ていただいています、そのことに触れて原田先生からお話をさせていただきます。

(マイクを持ちフロア最前列に座っている男性のところに降り、マイクを手渡ししながら)先生、では、どうぞよろしくお願いします。皆さん、拍手をいただけたら。(会場から拍手)

《フロア H》

(ゆっくりと立ち上がりフロアの方を向きながら)原田彰と申します。一昨年でしたか、2016年のこの人権地域フォーラムに、板野中学校の1990年度から1991年度の私の本の中に取り上げた生徒さん3人がパネリストとして出られるということで、私も非常によろこんでパネリストの1人に加えていただいていたのですが、この人権フォーラムが近づいてきたところで突然脳梗塞で倒れてしまいまして、欠席せざるをえなくなりました。彼ら彼女らにも会えなくて、非常に残念な思いをしました。

それで、去年またパネリストをとということで出ささせていただいたんですけど、私が身体が固まってしまったようになってうまく話せなかったもので、何か間の抜けたような感じで、1年遅れて何を話しているんだという思いで、すずすと帰って行ったんです。私は東広島から来ております。

そして、今年またこういう機会を与えていただいて、こうして最初に話をさせていただく時間をいただいて大変ありがたく思っております。(話す内容を自分の中で確かめながらゆっくりと)なぜ私がA先生の担当されたクラスの生徒たちのことを取り上げるようなことをしたのか、そのことを今一度少し考えたいと思うのですけれども、しゃべりだしますと止まらなくて1時間でもしゃべりますので、できるだけ簡単に済ませたいと思います。

今日、資料を1部配らせてもらいました。お手元にあると思います。「喪失と再生」という大げさな題名

をつけているわけですが、「児童心理」という冊子に執筆した原稿です。自分の思いを書けと言われて書かせていただきましたが、今読み返すと恥ずかしいようなものですが、ご参考までに読んでいただけたらと思います。本日の資料は、コピーしたものをまたコピーしましたので、見にくいものになってしまいました。(照れくさそうに)これはすべて私の責任です。

私は小学校4年生で母を亡くしました。実はその前に、当時、日本の植民地であった朝鮮で生まれ育った人間です。小学校2年生までいました。満3歳の時に、健康優良児に選ばれていた母が結核になって、戦後の栄養状態の悪く中で、どんどんやせ細っていきまして、小学校4年生で亡くなったという寂しい幼少期を過ごしました。この資料の中にそういうことも書いてあります。母親は、昭和22年に亡くなりました。その後23年、24年と2年間は、父と2人きりの生活をしました。ものすごく孤独な子どもでした。

実は、そういう中でですね、私が今思い出してみますと、その当時クラスの中にワルばかりおりました。他の者を脅してお金を持ってこさせることなどをしていた者もおりましたし、私も、店に行って盗みなどしていました。ほとんどそういう不良少年の状態でも落ちておりました。そんな私を父親が心配してかどうかは知りませんが、父親が再婚しました。父親が婿養子で原田の家に入って、私も連れ養子で原田の家に入りました。新しい母親とのことで、ものすごく葛藤があって悩むんですけど、そんな経歴を持っている人間です。

それはともかくとして、私が先ほども申しましたように、幼い時に私が経験したことに、そのワルの中のワルだった子が、私がそばにいる時にもらしたんです。「母ちゃんがないっていうのは寂しいよな」とつぶやくように言ったんです。実はその子はみんなが「あっちの子だ」と言っていたんです。当時は私の住んでいるところでは、被差別部落を「あっち」という言い方をしていました。

なぜ、その子が私に「母ちゃんがないっていうのは寂しいよな」ということを言ってくれたのかは、今もわかりません。わからないんですけど、私はその子に対して「ワル」ということだけでなく、何かつながらのようなものを感じたんですね。その後、そのことを忘れてしまっていました。忘れてしまいましたが、A先生の実践記録を読んで、何とかこれを解読できないかとやり始めた時に、ふと思い出したんです。私の幼少期のことを…。そして、それが意味のあることに思えたんです。こういう経緯を持っていることが、この「差別・被差別を超える人権教育」を書ききっかけになったように思うんです。

もう一つはですね。佐藤芳子先生が先日亡くなられましたが、そのお連れ合いである佐藤文彦先生ですね。佐藤文彦先生が鳴島第一中学校で大変に優れた同和教育の実践をされました。(懐かしそうに)私は、最初広島大学の大学院を出ました。そして、最初に就職したところが四国女子大学、今の四国大学です。そこに7年間おりました。実はそこにいる時に勉強するのが嫌になりましてね、結婚して、妻がその頃のことを思い出して、「あんたあの頃、本も読まなかったわね」と言って笑っていました。私はもう記憶にもなかったんですが、そういう状況でした。本当に勉強をしませんでした。しかし、その7年間いた間に、いろいろな同和教育問題についての経験をしました。一つ一つをお話するとそれは意味深いと思いますが、それは省略したいと思います。

四国女子大学の後、1973年に京都の同志社大学に行きました。伝統のある私立大学です。そこに採用されました。そこで、教員の差別発言事件などが次々に起こっていきました。同志社大学で1973年から数年過ぎすんですけど、政治的対立が激しくて、1968年から1969年にかけて大変な大学紛争が起こりました。それが治まった時期に同志社大学に行ったんですが、行ってみると竹槍みたいなものを持って、列を成して歩き、その連中が共産党系の学生と石の投げ合いをして、毎年12月になるとストに突入します。

大学もしかたがないので、全部レポートに切り替え、「レポート提出せよ」と学生一人ひとりに通知を出しておられました。そういう中で、教員の差別事件というのが起こりました。そこで非常に激しい糾弾が行われました。

そういう中で、非常勤に頼っていた同和教育の授業を、やはりこれは専任でやらなければならないということになりました。同和教育の授業を非常勤に任せてはおかしいということになり、福祉関係の先生方、社会学、歴史学、教育学部の先生方がその任にあたりました。私は教育学部でした。神学部の先生方が一番熱心でした。躊躇することなく、真っ先に参加すると表明されました。

そういう中で、私はどちらかという形で担当者の一人に加わりました。ところが、同和教育を勉強するといっても、勉強できるような資料は何一つありませんでした。ですから、月に何回か神戸の方や大阪の方へ出かけて行きました。同和地区と呼ばれる地域に出かけて行って、差別にあった話を聞くということを繰り返し繰り返し1年くらいやりました。

そういうことをやった上で授業などをするんですが、同志社大学は、学生がものすごく多いんです。500人を超える人数の学生が受講します。ですから2クラス、先生方も分かれてやりました。私なんかの授業というのは、最初はものすごく抽象的で、何をしゃべっているのかわかりにくい。そんなことで済ますことができていたんですね。

500人くらいの受講生の一番前にいる学生たちが、共産党系の先生に対しては、毎週のように集中的に非難攻撃を繰り返しました。そういうのを数年間経験するんですけど、私は、同和問題、同和教育というのは、もっと考えなくてはいけないな。もっと勉強しなければいけないなと思うようになりました。

同志社大学の次には、徳島大学に行くようになるんですが、その前にいた四国大学で、体験した同和問題についての事柄を思い出して、あの時には何もしなかったな、傍観者だったなということを思っものすごく反省するんです。徳島大学にたまたまポストがあって、採用してもらいました。「ここでは前からのつながりもあるし、さあ、同和問題の勉強ができるな」という思いでやり始めるわけです。

教育委員会も、同志社大学でそういう経験をしてきているんだから、何か役に立つことが少しはできるだろうということで、小学校・中学校・高校の先生方の同和教育研修生、長期研修生ということでやっていくんですけど、(鴨島第一中学校で同和教育に取り組まれた)と石原佳和先生そこで出会うわけです。石原先生というのは、佐藤文彦先生が鴨島第一中学校で学校長をしておられた時に、同和教育主事をしておられた先生です。

佐藤文彦先生は人権劇などを創るのが好きですから、石原先生がそうとう力を入れて取り組まれたんだろうと思います。ですが、佐藤文彦先生を紹介していただいたのは石原先生ではなくて、何かの会合で出会って、それから親しくお付き合いをするようになって、いろいろなことを教えていただく。研究会があれば原田さん一緒に行こうと行って連れて行ってもらう。そういう関係ができていったんです。

言い忘れましたが、私が同志社大学を出た年(1978年)にA先生が同志社大学に入って来られました。そのことは後から知ったわけで、当時はまったく知りませんが、ある種の因縁をA先生とは感じています。

佐藤文彦先生が1988年1月30日に亡くなられ、2月1日にお葬式がありました。私がお葬式に出かけて行って、その時に初めて石原先生にA先生を紹介していただきました。ただ、私は道德教育の研究会などによく出かけていましたから、A先生は徳島県の道德教育研究会の事務局長をしておられたから、A先生のごことは知っていましたが、お話ができたのはそのときが初めてです。

それからA先生とお付き合いを始めるんですが、私は、徳島大学から鳴門教育大学に行った後、広島大学に移りました。A先生と離れ離れになるんですが、しかし、私はどうしてもA先生とつながりを持ちたいと思ひまして、広島大学の教育学部でA先生に同和教育の授業を担当していただきました。集中講義という形で、5年間広島大学に来ていただきました。大学がある東広島市に泊まっていたりしながら大学院生を中心に、飲みながら話をしました。

A先生が授業をされた感想文を読んでびっくりしたんです。私の授業で学生が書く感想文やレポートは、どこか拍子抜けしたような文章を書いてきます。ところが、A先生が集中講義された時の学生の感想文は、

ものすごい文章ですね。こんな文章をうちの大学の学生が書くのかと思うくらい、深い文章を書いています。これは、A先生も認めておられます。実際、A先生はこのレポートのいくつかを教材として引用しておられますが、実に論理的でしっかりした文章を書いています。

そういう中で、A先生の実践されたものを何か文章に表してみたいと思うようになったわけです。もうこれくらいにしましょうか。私ばかりしゃべっていてもなんですから。終わります。(明るい雰囲気の中で大きな拍手)

《コーディネーター A》

(壇上から降り、マイクを受け取るとあふれる笑顔の中で)先生と初めてお話をした佐藤文彦先生の告別式の日のお会いが鮮やかによみがえってきます。そして、広島大学で担当させていただいた同和教育の集中講義についても、忘れられない思い出がいっぱいです。人と人とが会うこと、そして豊かにつながっていくことが、この教育のよろこびなんだと思います。

このフォーラムでの出会いもそうです。この出会いが豊かなつながりとなっていきます。本当に限られた時間ですけど、できるだけ多くの人の思いがこの会場にあふれていって、部落問題を「わがこと」と考え、「わがこと」として受け止めていただく時間になればと思います。

やっぱり自分です。自分が幸せになっていないのに、子どもに対して、親に対して、家族に対して、愛情のこもった対応はできません。まずは自分です。自分自身が解放されていくということが問われていくんだと思います。それでは挙手してください。(前の方からまっすぐに手が挙がる)はい、じゃあお願いします。

《フロア S》

すみません。鳥取県から来ました。鳴門市人権地域フォーラムに来るようになって14年になります。ここで皆さんから本当にいろんなことを感じさせていただいたり、力をいただけてきました。実は、毎年この時期に鳴門に来るということは、職場の中で日程(看護師としての勤務を決めるシフト)を調節させていただいたんですが、具体的に何をしにくるかということはありませんでした。

「徳島は観光に行くんでしょう。阿波踊りを踊りに行くんでしょう」と病棟の看護師長から話がありました。

「いえ、私は人権の研修をしにくんです。次の日も、人権に関わるような歴史の勉強とかさせていただいたり、いろんな学習をしてくるんです。まあ、観光も多少はあるかもわかりませんが、観光が目的で行くんじゃないんです。」

そう、職場の中で普通に話ができるようになってきたなと思います。やはり、自分の一番身近なところで自分が何をしようとしているのかということ、自然な形で語れるようなこの空気を大切にできることがすごく大切なことだと思います。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

30分くらいの時間しか取れません。できるだけ多くの方どうぞ。(中央から手が挙がる)はい、どうぞ。

《フロア H》

香川県高松市から参りました、鶴尾中学校のHです。今、Sさんにお話いただいて、本当に20年ぶりで、何度か全国同和教育研究大会でお会いしたことはあるんですが、懐かしいなと思ったり、一昨日、鳴門市人権地域フォーラムがあるから来ないかと、急にメールをいただきまして、初めてこのフォーラムに参加させていただきました。

もちろんやっていることは知っていましたが、今日も中学校の教員仲間たちも来ているんですが、僕は、

1996年に鶴尾中学校に勤め始めてですね、その時に板野中学校の全体学習を何度か参観させていただいて、ちょうど22年前ですから、参観させていただいた時に、Cさんも中学3年であの全体学習の中で、お話をされていたんじゃないかなと思いました。その時から鶴尾中学校でも「語り合う学習」を続けています。今も続けています。

(一言一言をかみ締めるように)香川の先生方をご存知かもしれませんが、鶴尾中学校が2年半後に閉校することになりました。少子化に伴って、学校の子ども数が少なくなってきたこともそうですし、その背景にあるいろいろな施策であったり、同和問題も何らかの影響を与えている。差別に負けて学校がなくなるということにはしたくないですし、私が鶴尾中学校に帰ってきて3年目、勤め始めて20年になるんですが、一生関わっていく地域の学校として本当に胸が痛くなる思いです。

後2年半を鶴尾中学校の子どもたちに何を伝えていくのか。それを悩んでいた時のA先生からのメールでしたので、すぐるような思いでここに寄せていただいて、CさんやBさんのお話を聞いてですね、私が帰ってきて、当時の教え子たちは覚えていたと言います。当時の学校の中で、語り合う全体学習のことは今も残っていますし、先ほどあった、卒業した後も闘いである子どももいれば、思い出になっている子どもたちもいるんですけど、ムラの子どもたちが今、強く立っていることについて、こういうフォーラムも最後に鶴尾でもやりたいなと考えた次第です。

(自分の中で確認するように、ゆっくりと丁寧に)この仲間なら言えるという、しんどい時に誰に一言電話をかけて力をもらうのか。教員もそうですけど、そういう仲間とのつながりをつくってからの全体学習だと思いますので、教員が関わっていくのは当たり前だけれども、子どもが本当につまずいた時に誰に相談するのか。私たちは常にそこで待っていてあげられるけれども、本当に支え合うのは子どもたち同士なんだということ、この全体学習の中でも学ばせていただきました。

小学校は残りますので、1つの小学校から1つの中学校へつないでいたものを、今度は6クラス、7クラスある大規模校に小学校の子どもたちが出て行きます。この中学校が担っていた仲間をつなぐ力を小学校でしっかりつけていきたいなと思います。その力をもう一度ここでもらったなと思います。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

力ももらうけど、切ない思いになることもあります。でも、歩き続けていかなければ何も生まれていけないと思うんですね。この場だから言える。ここだから言える。そういう場しかないかもわからんけど、そういう場を大事にしていくことによって、私たち自身が本当に豊かになっていくし、人間として力が生まれていくんだと思います。是非つなげて入ってほしいと思います。(会場をキョロキョロしながら)はい、どうぞ。

《フロア H》

失礼します。三重から来ました。Hと言います。A先生、パネラーの3人の方、お話を聞かせていただきありがとうございました。自分は三重で教師をしているんですけど、A先生には、「峠を越えて」～魂の同和教育実践者～の人権啓発ビデオの出た前後から何度も三重県伊賀市に来ていただいて、話を聞かせていただきました。子どもたちの語り、学び、そこから生まれてくることをもとに、自分たちの伊賀でどうしていくんだということを実践を続けているということがあります。

(笑顔で)Cさんとか、こちらに居られるKさんとかをビデオ「峠を越えて」で観ていて、その後も結婚に関わることとかいろいろな部分の話を聞かせていただいて、一方的に知っているのですが、初めてお会いするんですが、何かなつかしいなという気持ちでここに来させてもらっている部分があります。今日朝7時に三重の伊賀を出てきたんですが、Cさんの話の中で愛知県から来ているという話を聞いて、(会場の愛知県の仲

間を振り返りながら)今日、平日でしょう。この平日に愛知県から来る、このつながりってすごいなあと感動しているんです。僕もそんなつながりをつくり続けたいなと思っています。

伊賀市の柘植というところにいるんですが、柘植でも、子どもたちの学びをどう生かしていくか。「ひとつと」から「わがこと」へとやることをやっているんですが、柘植は、柘植小学校と柘植中学校と1つの小学校から1つの中学校へ上がってくるんですが、そこで、自分が教師としてではなく、一人の柘植に住む親として見てきたことを紹介させてもらいます。

子どもたちの語り合いを、子どもたちのつながりだけではもったいないということで、1枚文集ということで、自分の生活を綴ったものを学級通信で毎日発行してくれています。教師が生徒(児童)が書いた日記をもとに、その生徒(児童)とそこに書かれたことをもとに「思い出し直し」をし、「お前はどこにこだわるんだ」「自分の思いやぐらしで伝えたいところは何なんや」という形で話をし、言葉を足し、思いを足して綴られたものが毎日出てくるんです。「何が楽しかった」ということではなく、クラスの中の見えていなかったその子のぐらしやこだわりや思いなど、いろいろ見えてくるんです。子どもたちの親への思いとか、いろいろな部分が出てくるんです。フルオープンで、実名で出てくるんです。その文章を自分たちも親として見るんですが、親も自分の子どもだけではなく、他の子どもに関しても親のような気持ちになってくる時があるんです。

柘植では小学校のときと中学校のときにそれぞれ、職場体験というのがあるんですね。その職場に行く時に遠いところに行く生徒は列車などで行くんですが、2人の中学生が列車で職場体験に行く時に、高校生がちょっかいをかけて、「おい、中学生、どこから来たんや。こんな時間に何しに行くんや。」と聞かれて、「職場体験です。」と言って、「ああそうか。悪かったな。」その場はそれですんだんです。それで、職場体験を何日間か過ごして、終わって、学校での振り返りの中で、その時の場面のことをその女の子が振り返って発言しました。

列車の中で高校生に「お前どこから来たんや。」と聞かれて、自分はもう1人の子と一緒にいて、その友だちが聞かれた時にドキドキしたんだと言うんです。「お前どこから来たんや」と私が聞かれたらどうしよう。実は、この話をした女の子は小学校の時に、祭りに友だちと3人で行った時に、お店の人から「お前どこから来たんや」と聞かれて、「どこどこです。」と答えると「おお、そうか楽しんで行けよ。」と言われるんですが、3人目のその女の子の時に、地区名を言った時に、お店の人の態度がさっと変わって、「はよ帰れ」と言われるんです。

そういう経験を持っているので、職場体験に行く時、高校生に「どこから来たんや」と聞かれたときにどう答えたらいいのかと思っていたと言うんです。しかも、職場体験に行くと、その働いているところで、「お前、どこから来たんや。」と聞かれたらどうしようと思っていたと言うんです。地区名を言って差別されるということをトラウマとして持っていたことを、職場体験の振り返りの中でみんなに伝えたいんです。

すると、そのときに列車の中で隣にいた女の子がすかさず言ったのが、「自分らは小学校の時から部落問題のこととか一生懸命考えてきた。部落問題、差別の問題は、差別を受けるかもわからんと悩んでいる仲間の隣に座っている自分の問題って考えて、自分のことやと思って過ごして来たんやけど、列車の中で、その友だちが高校生に聞かれた時に、そのことで悩んでいるって気がつかなかった。一生懸命、部落問題を仲間の問題って考えて来たと思っていた自分が悩んでいる友だちの姿に気がつかない。その、気がつかない自分は何なんだろう」と言って、伊賀にもこのフォーラムのように素敵な中学生が語り合うフォーラムがあるんですが、その実行委員に立候補して行くんです。それは友だちのためではなく、部落問題が自分ごとになっていなかった自分を変えるためにその実行委員として立候補して行くんです。そんなやり取りが一枚文集で、通信でいっぱい出てくるんです。そのことをもとに親も子どもと話すし、柘植では、子どもたちの思いから親も学んでいるんです。

今、自分たちが親として思っていることは、子どもたちにそんなことを思わせて悩ませているのは誰かと言えば、自分たち周りにいる大人じゃないですか。(力を込めて)差別は、就職とか結婚とか、人生の中で「よっしゃ！これから頑張ろう。」と思っている時に限ってやってくるんですよね。その許せんことをやっているのは、そこに住んでいる大人やなと思うんです。俺たち親が、大人が頑張らなくてどうするんだこの問題は。だって、子どもたちは友だちの思いを自分の問題と思っているのに、大人が子どもの姿に学ばなくてどうするんだということです。

今、柘植では「柘植っ子」といって、一枚文集でいろんな思いやいろんな現状がいっぱい出てくるので、自分の子どもだけではなく、他の子どもも、地区に住んでいるとかいないとか、外国にルーツがあるとかないとか、そんなことに関係なく、誰の子どもも自分の子どもとして一緒に考えていこうということを親ながらにやっています。一人一人の親が自分ごととして考えていけたらということ、わずかずつですが、頑張っています。今日はありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

いろんなご意見をいただけたらと思います。(会場を見渡ししながら手の挙げた男性に)はい、どうぞ。

《フロア S》

高知県の安芸郡東洋町というところから来ました。(ゆっくりと一言一言を大事にしながら)「ひとごと」から「わがこと」へというテーマと、今日、実はこのチラシを見ていたところで、ドキッとした文言がありまして、「当たり障りのない人権教育」という部分を目にした時にドキッとしました。

僕は小学校の教員をしております、いろいろなことをつらつら思い返した時に昔々こんなことがありました。昭和の世が平成の世に変わった年です。寒い2月のことだったんですね。僕の出身は愛媛県の松山なんですが、たまたま近くのキリスト教の教会に通っていた時期があって、その牧師さんから「こんなものがあるけど、行ってみない？」と言われたのが、大阪の釜ヶ崎です。寒い時期ですから、寝泊りするところがある人はいいんですけど、外で寝泊りしなければならない人は、当然命の危険にさらされるわけです。そういう人たちを引き取ってケアをするボランティアがあるんだけど行ってみないかと話があって、「はあ」ということで、何も考えずに行ったわけです。

その時代はバブルの名残が残っている頃で、景気は当然良いんだけど、そこにいて住んでいる人たちはいて、ベースキャンプに行った時、綿入れを着て過ごされていました。同じ年代の人で関西にいてずっと支援にかかっている人も当然いるわけで、やり場のない怒りというのが当然あるわけです。

夜間の活動があったあとキャンプに戻って反省会を行います。そのなかで、キャンプを主宰する牧師さんのことばが、今でも非常に印象に残っています。それはなぜかといったら、一見解決しようもない問題なんだけど、解決のためには何ができるかといったら「まずはその道のプロになって一生懸命仕事をする事だ」と思う。僕は牧師だから、牧師のプロになる。そうすることで、解決に少しずつ近づくんじゃないか」というお話でした。

大学を卒業した後、愛媛で何年か教員をしております、A先生と出会ったのはちょうどその時期でした。その後、縁がありまして、今、高知県で働いています。普段自分がやっている授業とかを考えた時に、小学校の教員ですから、当然いろんな問題があるわけです。一人ひとりがしょっているもの、置かれている状況は違います。

僕は、今の学校へ来て2年目なんですが、それまでは本当に小さな学校でしたから、そういうことにそんなに直面したことがなかったんです。今の学校へ来て、再びクラスを持つようになって、いろんな現実に出会ったりしました。相手かまわず、本当に「どうにかせえよ」と思うような言葉が飛び交うことがあります。

乱暴で、思いやりのない言葉が。これには、心が折れそうになりました。

そこで僕が何をしたかという、さっきもお話があったけど、自分が辛かったことを言いました。僕が小学校の時は、1クラス40名で6クラスあるような結構大きな学校なので、当然周りのいじめもありました。自分が辛い思いをしたことというのはやっぱり言いたくなかったです。若い頃どこかでそれを隠している自分がいたんですが、本当に人がどれだけ痛い思いをするか、辛い思いをするかというのは、痛みを知っている人間じゃないとわからないと思うんです。

自分が辛かったことを子どもらにぶつけました。4年生ですよ。思いっきりいきました。学級通信を通して親御さんにも話をしました。それこそ、毎日辛いこともあります。でも、不思議と朝学校へ行くとすごく幸せを感じるんです。何でかという、やっぱり、自分の腹を割って話している子どもたちですから、彼らも本当に辛いことを言ってくれるようになって来ました。

さっきのプロ意識という問題になるんですけど、何を持って教師のプロと言われるかということですが、少なくとも、私は、少しはらしいことができるようになったのかなと思います。やっぱり自分をさらけ出すこと、一つのことを改めさせるのに、半年くらいかけて準備しなくちゃならないこともあると思います。時間がかかるし、息の長い時間が本当に必要なんだろうと思います。

それから、全然話は飛ぶようなんですけど、3.11(東日本大震災)の後、2012年から定期的に気仙沼の方に行っているんですが、先日その小学校の方からご案内をいただきました。先日の西日本豪雨ですね、私のかつて勤めていた宇和島市吉田町。そこが壊滅的な被害を受けました。みかん山が大きな被害を受け、どうやって生活していこうかという現実があります。

気仙沼の大島から、これを役立ててもらえないかと子どもたちが義援金を募っているということを伝えてくれました。痛みがわかるという話をしたんですけど、気仙沼の大島の子どもたちは、震災を受け痛みがわかっているからこそ、そういう行動に出られたんだろうし、僕もかつて勤めていたところですから、辛さがわかるから本当にありがたいと思いますし、それをつなぐことにしました。

日々闘いであったり思い出になったりという話があるんですけど、いろんなことが起こると、いろんな差別の現実突き当たっていきます。障害者の問題であったり、国籍の問題であったり。私たちは日々いろんなところで生きていて、いろんなことに出くわすんだけど、そういったことに対して自分は、仕事が変わることがあります。どんなことに対しても。一生の思い出になっていたとしても、あることに対して闘いに変わっていくこともあるだろうし、子どもたちの将来の力になると信じて今の仕事を頑張っていこうと思っています。今日は改めて自分の立ち位置を確認することができて、本当に良かったなと思います。ありがとうございました。

《コーディネーター A》

(中央付近を示しながら、次の発言を促す)

《フロア M》

Mと言います。(パネリストの)Cと、向こうに座っているKもですが、同級生です。去年から参加させてもらって、今年もフェイスブックで今日あるって知って、パネリストを見て、Cって書いてあるし、でもTだなと思って、僕が自営業なので融通が利くので今日参加させてもらいました。

中学生で全体学習に出会ったり、中学生集会や高校生友の会に参加したり、社会に出てからは運動団体(部落解放同盟)にも所属して、活動もしてきたつもりなんですけど、働き出して、独立して、自営になって名刺を作りました。今、板野町のKという地域に住んでいるんですが、初めて名刺に対して不安があるんです。自分の住所を書くのに不安が出てきて、何でこんなに運動もしてきたのにこんな思いになってきたんだろう

と思った時に、やっぱり、子どもができたこと。自営となった時に、この住所を見た時に仕事が減らんかと考えてしまうようになったんです。

生活となったら自分が極端に弱く感じてしまって、これで子どもが食べれんようになったらどうしようとか考えるようになったんです。ただ、それが頭打ちではなくて、じゃあ、どうしたらいいんだろうと思って、こういう集会とかに参加するようになったのも、もう1回勉強しようと思って参加しているんですけど、やっぱり一番変えていかなければいけないのは、教育現場だと思います。

何て言えばいいんだろう。下から変えていかないといけないと思うんです。今の卒業生とか、全体学習に関わる先生とか、寝た子を起こしてきたと思うんです。今の発言を聞いて、寝た子が今起きたままになっていると思うので、せつかく起こしてきたのに、この子らが頑張れる状況をつくって行って、…どう言ったらいいんだろう。名前をすつと書けんかった時に、これが部落差別だと改めて感じたんです。

1人では太刀打ちできんことに直面してしまって。これを変えていくのは、やっぱり教育現場である、小学校・中学校・高校・市町村・県・国までが「差別をせん。させない。」という姿勢でせんだらエンドレスになる、こういうことを感じてしまったんです。運動団体も今弱くなっていますし、僕らが今親になってできることは、せつかくこういう仲間がつながっているし、これをもう一回考え直して、今、自分ができることというのを、やっていかなければいけないなと思っています。

(気持ちを切り替えるように笑顔で)Cの友だちの愛知県から来てくれた3人ともまたつながりができたし、こういうつながりをもっともっと作って行って。今、いじめがあっても見て見ぬふりをする子の割合の方が多いかも知れんけど、これはいけないと言える子の割合を多くしていかなければいけないのではないかなと思います。

そのためには、僕らみたいに地区の子だったら部落差別のことに對して声を上げる。いじめられた子だったらいじめのことに對して声を上げるということを、何とか先生たちにも声を上げられる環境をつくってもらって、地区外の子、差別をしてしまう側の子に對して問題提起して、それをお互い意見交換して、距離を縮めていけるんじゃないかなと思います。これが親になって思うことです。頑張っていきましょう。(拍手の中マイクが次の男性に渡される)

《コーディネーター A》

最後の発言になります。

《フロア I》

すみません。最後をとってしまいました。Iと言います。ちょっとここで話をするとするとドキドキします。あちら側(1996年度鳴門市人権地域フォーラムにおいて板野中学校1991年度卒業生としてパネリストを務める)にいた時には温かかったんですが、ここ(フロア)は、ちょっとクーラーが効いて寒いので、頑張って発表して温まるようにしようと思っています。(会場に笑いがこぼれる)

この会に参加させていただいたのが、ちょうど2年前になります。前にいらっしゃるA先生は、僕が中学校3年の時の担任で、その時の生徒ということになります。ですから、前のパネリストの方よりは少し年齢が上になります。少しではないかもしれませんが。時間をとって申し訳ないのですが、原田先生の欠席された時のパネリストということできておまして、その後、原田先生とお話させていただいて、自分もちょうど忘れていたところを、後ろに本(「差別・被差別を超える人権教育」)がありますが、その本を読ませていただいているいろんな記憶がよみがえったというところがあります。

ここでは、自分のことについてお話をさせてもらえたらなと思っています。若い頃のことを振り返ると、前のパネリストの方のように自分の家族の中で話をすることは特になかったです。このフォーラムに参加した

ことによって、この全体学習という取り組みが徳島県内だけ、また、地区内だけではなくて、いろんな所に広がりを持っているというところがいろんな話を聞いて自分のためになるので、勇気と元気をもらっているような形になっていると思います。

ただ、僕は教師でもないですし、ただ一般の人なので、こうして話を聞くだけで、自分で持ち帰って自分の中で整理をするということになっているので、そこは皆さんとちょっと違うかもしれません。

僕が中学校の時ですね、僕は何も知らない中学生でした。ちょうどA先生が僕の家庭訪問の時に、「お前は部落の出身なんぞ」と言われました。その時、僕は何も知らない普通の学生でした。原田先生の本を読み返すと、その時のことを気づいていなかったのは僕ともう1人だけだったようです。それまで何も知らなくて暮らしていたことが、その発言によって世界がまったく変わります。

皆さん、皆さんが先生だったら、生徒を目の前にしてお前は地区出身だと言いますでしょうか？ここはよくわからないんですが。相手に対して「お前は地区出身なんぞ」と、知らない人に対して「お前は地区出身なんぞ」と、知っている人に対して「お前は地区出身なんぞ」と、また、自分の家族に対して「お前は地区出身なんぞ」と、自分の兄弟やお父さんに対して「自分は地区出身なん？」とか。

その同じ言葉であっても、とらえ方や状況によって意味が変わってくると思うんです。ですから、僕が言われたことを皆さん創造してくださいと言うのは無理だと思うんですけど、そういうことがありました。

パネリストの人も話を聞いて、「地区ってどういうことなん？」「部落ってどういうことなん？」と、もし子どもさんから聞かれた時に、僕には今小さい6歳の子どもがいるんですけど、子どもにどういうふうに伝えたらいいのか。どういうふうに教えていってあげたらいいのか。それは、家で教えてあげるものなのか、それとも学校で教えてあげるものなのか。地域で教えてあげるものなのか。そこらへんがわかっていなくて、どうしていったらいいのか悩んでいるところではあります。

特にパネリストのCさんの話を聞いていると、おうちの方でも話をされているようですし、お友だちの広がりもあって、ネットワークを持たれているようなので、自分の子どもに対して、また、奥さんに対して、どのような話をされているのかなと興味を持っています。

僕の奥さんは、僕と結婚する時に結局反対がありまして、いろんな問題もあったんですが、うちの奥さんは少し変わっているところがあるので、それはいい意味でなんですけどね。(会場に笑いがこぼれる)結婚もできて子どももすくすく育っているところもあります。話を取り留めなくなってしまったんですが、そういう話もパネリストの方からも聞けたらと思って、時間のない中、発言させていただきました。ありがとうございました。(拍手)

《パネリスト C》

(コーディネーターから促され)名前が上がったので、自分の考えを言わせてもらいたいんですけど、座ったままですみません。自分も9月で6歳と今年3歳になる娘がいます。いつその話について娘と向き合うんだろうと考えたりします。先ほど名前の出てきた、T。彼と自分の娘にどのタイミングで言う、言わんというやりとりをしたりもします。

僕が言うのは、僕は絶対に伝える。じゃあ、どういうふうに伝えるかと言われた時に、何を聞いても動じんハートづくりというのを、できたらしたい。娘は嫌がるかもしれんし、嫁さんもやめてくれと言うかもわからんし、嫁さんはどちらかと言うと、寝た子を起こす的な考えのところもあって。関係ないとは言ってくれるんですけど、実際結婚する時、嫁さんの両親には、「じいちゃん、ばあちゃんには、わざわざ言う必要もない。わしらはいいんやけどな。」みたいなことを言われています。人生、もっと勝負しなければいけないところもあるのにといいところにいます。

でも、娘に親を恥じんでもいいような生き方、小さいことですが、例えば保育園に行った時に、運動会で

綱引きがあった時に一番前で綱を引くとか、僕の夢は、子どもが小学校中学校に上がったなら、PTAの会長になって、娘が恥ずかしいくらいに前面に出て行って、これが自分だと言おうかなというところがあります。出れるところはどんどん出て行こうかなと思っています。

その結果逆効果で、娘が本当に悩んでいる時に気づいてやれん時は怖いんですけど、自分が育った環境、親が自分に教えてくれたことというのは、そのまま子どもには伝えていきたいし、僕の考えで、お金に例えていいかどうかかわらんですけれど、親というのは絶対的な資産であって、嫁さんや子どもってというのは、定期預金をずっと積み立てていって、年月が経つにつれて大きくなって、友だちというのは、言い方が悪いかもわからんけど、普通預金。裏切りとか何かあった時にはマイナスにもなるし、つながっていけるほどまた貯まっていけるし、でも、資産にしても、定期預金にしても、普通預金にしても、全部ひっくるめて財産になるんで、それがマイナスになろうがプラスになろうが、(一言一言を、自分でじっくりと確認しながら)結局自分が死ぬ時には、娘のお金につないでいったらいけないものだという考えがあるので、自分が経験したことを伝えなくていいということはないと思うので、伝えなくていい理由をみんなが考えているような気がして、伝えるためにはどう伝えたらいいんだろうと考えてしまうんです。

さっきお金の話に置き換えたんですけど、養子に入ったので、リアルな財産として、Tの財産が僕に入るかとそうでないかわからんけど、(会場に明るい笑い)今の考え方があっているかわからんですけれど、人それぞれの価値観もあるし、一生隠してそれで幸せな人も居ると思うし、一生知らずに幸せな人も居ると思うし、A先生に結婚する時に言われたのは、「価値観の共有だ」ということです。

だから、僕も奥さんのことを必死で、必死でって言ったら怒られるかもわからんけど、(笑い)認めるようにするし、奥さんは、僕のことを一歩引いて考えてくれるし、同じ価値観のもと、その価値観を子どもらに見せて、いちいち親が立ち止まっている時間はないから、言いたいことも言える関係性を作っていけたらと思っています。これが僕の価値観ですから、もちろんそうではない人もいると思うんです。うまく伝わったかどうかかわからんですけれど、決して良い、悪いという問題ではないと思います。

《コーディネーター A》

この中には、被差別部落の方も居られます。そうでない方も居られます。でも、その立場にならなければわからないことは部落問題だけではなく、実際にたくさんあるわけです。部落問題だけではなく、いろんな人権問題を語り合える仲間を、同僚を、友人を、どれだけ持っているかということが、人間として生きていくうえで大きな大きなものになっていくと思うんですね。

板野中学校に赴任した時に、クラスに5人から10人の地区の子がいるわけです。その子らと部落問題を本当に語り合える。そして、その子ら同士が語り合っていく。そういう深い絆ができたなら、俺は教師になった意味があるなあと思いながら板野中学校に赴任して行ったんです。

その時に中学2年生を担当したわけですけど、学級を持って一番最初にしゃべった言葉が、私の高校時代のことなんです。それは何かと言えば、私の中学校時代は、クラスの半数が部落の仲間です。これは、部落に生まれても幸せなことなんです。仲間がいるということが。柔道をやっていまして、中学2年3年と全国大会に出ているんです。それは全部部落の仲間です。指導してくれた先生も部落の人だったです。それはやっぱり、柔道を強くするということによって、部落差別をなくすという願いが込められていました。教師になれというような話をしてくれた先生もいます。

(力強く)そして、私の人生において本当に大きかったのは、法(同和对策事業特別措置法)ができて、中学2年の時に家の近所に隣保館ができて、地区進出学習会が始まったんです。その意味がわからなかったです。近所の仲良しが、どうして我々がそこで勉強しているのか、教えてくれました。クラスの半数が部落の子ですから、ものすごく勉強のできる子もいるんです。学力的に厳しい子もいますが、でも、その子らが仲良く

勉強している時に、何のために勉強しているのかもわからず、仲良く勉強を教えあいながら切磋琢磨していたんです。

その時に話した友人の言葉はずっと今も私の中に生きています。「Aちゃん、学校の先生にならんで。」「何でな。」と言ったら、「Aちゃん、わしはな、この差別をなくすのは、学校の先生になるのが一番ええと思うんじゃない。」「この差別って何なあ。」と問い返したら、「ああ、Aちゃん知らなかったんか。わしらは部落に生まれたことになっとるんやで。」

(精一杯の思いを込めて)この友だちの言葉が、私の人生においてある意味、一番幸せな瞬間だったかもわかりません。ショックもあったですよ。やっぱりそうだったのかと、やっぱり揺れましたよ。でも、そこから自分というものを深く見つめる作業が始まっていったんです。

地区を知るということは、自分の中にも差別意識はいっぱい入っていますから、自分は違うと思っていますから、思い上がっている部分もいっぱいありますから。それは知ったらショックですよ。自分の差別意識が自分に向いていたんですから。そのことに気づいたら人間強くなります。

部落に生まれてよかったと思え、父ちゃん母ちゃんの思いをきちっと受け止めて、差別をなくしていく。そんな生き方をしっかりと子どもたちに届けていく。そんな教育が私たちに問われていくと思うんです。(渾身の力を込めて)差別をなくす誇り、差別をなくすよこび。やっぱり、結婚するんだったら、そのことを一番語らんかって思うんです。そのことを語り合って、本当に夫婦の絆、家族の絆をつくっていかんかと思うんです。

一番しんどいけど、一番苦しいけど、その一番しんどいことを言い合える関係。その夫婦の会話が、家族の会話が、子どもたちの生きる力になりますよ。父ちゃん母ちゃんは、部落差別を必死になくそうとしてきた。じいちゃんばあちゃんもそうだ。その思いを受けて自分はどう生きるかということです。自分の言葉で、自分の思いを伝えていく。その思いを綴っていくということです。

今日ここにおいでいただいた皆さんにマイクを握ってもらうことは無理です。しかし、どこかで発信する。職場で発信する。家族の中で発信する。そんなやり取りをつくっていただきたいと思います。

最後に去年、「夢は夢にあらず」という言葉を紹介してもらった「サライ」という曲をみんなで歌いたかったんですけど、たぶん無理だろうなと思っていましたが、やっぱり無理でしたね。(会場に笑い)時間が来ました。今日のパンフレットにつけていますサライの歌詞は持って帰って歌ってください。準備はしていましたが、無理かなという予感はしていました。

皆さん、本当に自分のことを誰かに発信してください。自分に何ができるかということです。それは発信するということです。パネリストの皆さんに力をもらいました。やっぱり、語り合うということはすごいことです。自分に突きつけながら、問いかけながら、歩いていきたいと思います。

原田先生、本当に遠いところをありがとうございました。きていただけたことに感謝いたします。原田先生に拍手をお願いします。(大きな拍手の中、原田彰さんが立ち上がりフロアを向いて挨拶をされる)パネリストの3人に今一度拍手をお願いします。(大きな拍手)これで今年度の人権地域フォーラムを終わります。ありがとうございました。

《司会者》

A先生、パネリストの皆さんありがとうございました。閉会にあたりまして、鳴門市人権教育推進協議会会長がご挨拶申し上げます。

《鳴門市人権教育推進協議会会長》

失礼します。最後の言葉をA先生の方から話していただきましたので、私の方からお話しすることもない

んですけど、一つだけ言わせてください。この仲間なら言える。本音が出せるという仲間づくり。そのような地域でありたいし、学校でありたいし、職場でありたいなあとと思います。そういうことに関して、私も今日から一歩でも良いから担っていききたいものだと思っております。

A先生を始め、パネリストの皆様、そして、会場の皆様から大変有意義な発言をいただき、鳴門に人権地域フォーラムありと、誇らしく思うところであります。昨年できました部落差別解消の推進に関する法律を軸足として、人権尊重のまち・鳴門づくりにいっそう励みたいなと思っております。本日はどうもありがとうございました。お帰りは気をつけてお帰りください。皆様本当にありがとうございました。

終了

《参加者の意見・感想》

◎同和教育は人間教育であると思います。

◎初めて参加させていただきましたが、非常に勉強になり色々と考えさせられ、又、共感することがたくさんできました。この経験をこの先、自分のまわりの人にも伝え共感してもらうという輪がこれから大きくなっていけばと思います。

◎正直、同和教育を知らなければ知るほどわからなくなりますけど、それと同時に自分のやるべきことやいろんなことが確実に変わっていきます。自分は友だちを支えることしかできませんが。

◎現場で人権学習に取り組んでいる教職員の参加をもっと増やすとよい。カミングアウトをされたときに、友人としてどう対応するのが一番よいか、対応を深めてほしい。

◎人権研修は各地域で開催されているが、この研修は心の底からの語り合いがあり、毎年身が引き締まる思いと、自分を厳しく点検する機会になっている。来年も来たいと思う。ありがとうございました。

◎人権学習は歴史学習ではなく、単なる知識を身につけることでもない。人権学習は生き方をみつめる学習。人の顔の見える、人の思いの見える、その人の人生、生き方の見える話をかがみに自分を見つめること。そのことを出し合い、自分の生き方、実践のみでつながっていくことだと思ふ。また参加させてください。ありがとうございました。

◎自分が考えている以上に深くこくな問題だと思いました。差別が少しでもなくなるように地元にも伝えていきたいと思いました。

◎お話を伺い、元気もらいました。

◎素晴らしい。続けてほしい。

◎また来年来たいと思つた。

◎鳴門会場なので、もっと鳴門市民のみなさんにも参加してもらえたらと良いと思う。鳴門市民の意識をもっと広げてほしいと感じた。

◎A先生の「その立場に立ってみないとわからない」という言葉にうなずけました。

私もある問題に対して(恋愛において)自分の小ささを痛感したことがあります。

「ひとごと」から「わがごと」へという言葉は良い言葉だと思います。

また今回初めて参加しましたが、フォーラムは大人が語り合う場として、存在している良いフォーラムだと感じました。また、今後も参加できればと思います。

◎地域の人たちなりに色々苦しんでいることを初めて知りました。

相手の気持ちを思うこと、改めて感じました。

◎友だちがうちあけてくれた「被差別部落出身なんよ」という言葉に「私はそんなこと気にしないよ」という意味を込めて「ふうん」とあっさり流した。それが友だちを逆に傷つけていたのかもしれないことを初めて思い知った。「ひとごと」としかとらえていなかったんだなと思った。

◎今の子ども達が大人になったときには、差別がなくなるよう教育を充実していく。

◎全体学習の素晴らしさを再確認。実際の授業を見てみたいです。

- ◎毎年楽しみに来させていただいています。来年も是非実施してください。
- ◎全体学習をしてきた子どものその後を年代別に聞くことができて良かったです。彼らのその後の人生において、大きな意味を持った全体学習の意味を改めて再認識しました。
- ◎とても勉強になりました。
- ◎自分から発信する大切さを知りました。自分に何ができるか考えて生きていきたいです。
- ◎今回の最後の話で、伝えることの大切さを改めて考えることができました。ありがとうございました。
- ◎パネリストの皆様の実体験は、非常に心に響くものがありました。私も50歳を超えましたが、小学校中学校の時に身につけた同和教育とは比べものにならない、逆に言うと、当時自分があまり考えていなかったことに恥ずかしくなりました。
- ◎現在もなくなる差別に対して、自分が何ができるか、それをもう一度考えてみたいと思いました。
- ◎自分のことばで語ることが大事だと実感させていただきました。
- ◎自分も親にありがとうを伝えます。
- ◎本当に来て良かったです。鶴尾中のこの後をこれからも全力でかかわり続けるエネルギーをもらいました。このつながりはいつまでも大切にします。私たちがやらねばならないことはまだあることを確信しました。語り合える仲間、人、友、生徒すべてが宝です。人とのつながりと出会い、本当にありがたいです。

鶴尾中学校 H

- ◎パネラーの方々、Aさん、本当にありがとうございました。とてもあたたかい気持ちになりました。このパワーをもう一度鶴尾の子ども達のために。
- ◎部落差別されている人の悲しい気持ちがよくわかった。
- ◎本当に来て良かったと思いました。また明日からがんばれそうです。
書きたいことはたくさんあるのですが。
- ◎また参加したいと思います。今日勉強したことをまわりに返していきたいと思います。
- ◎当事者が語ってくれることばのひとつひとつにとっても深い学びがありました。中学校時という話でしたが、◎現場でどう生かせば良いのか考えさせられた時間でした。地区の子ども達がどう考えているのか、精一杯考え気づき寄り添っていきたいと思います。ありがとうございました。
- ◎自分にできることを考えさせられました。ありがとうございました。
- ◎たくさんの人の生き様を聞くことができて良かった。思いを知ることができた。
- ◎3人のパネリストの思い、フォーラムで発信してくれた方の思い、熱い思いに感動しました。今の私が、何ができるのかを考えなければいけないかを痛切に感じています。家で語り合いすること、職場で語り合いをすることからはじめようと思います。来年も参加したいと思っています。
- ◎A先生、パネリストの皆さんの話にとっても聞き入りました。自分は「ひとごと」だったことを痛感しました。これからは「わがごと」として考えられるようにしていきたいと思いました。
- ◎毎回多くの学びがあります。知る機会が必要だと思います。
- ◎「それがどうした」という反応はやはり、「ひとごと」なのだ。「それを聞くとがっかりする」というA先生の思いを聞くとそう思う。他県から、多くの人に参加しているのが素晴らしいと思う。しかも貴重な意見が聞けて良かった。
- ◎今回初めて参加させていただきました。自分がみんなの前で部落ということを発表するということは大変勇気がいることだと思う。私だったらいえないことだと思う。やはり結婚となれば反対するでしょう。フォーラムに参加したのにこういうことを言っただけです。また、参加したいです。
- ◎人権地域フォーラムに初めて参加させていただきました。Bさんのお話、孫がみなと学園高校でお世話になったことを思い出しながら聞きました。現在、孫は高校を出で働いていますが、安い給料で働いています。普通のお給料をいただけたらと思います。

◎何はともあれ名古屋から、広島先生、三重から、高知からと。すごいつながりです。

差別→学校の教育から…もちろんそのとおりかと思えます。

そして、社会教育も…、引き継いでの研修をしていきたい。

◎人権学習について本音を聞くことができ、これからの自分の生き方について考えさせられる素晴らしい機会になりました。

◎「目から鱗」の時間でした。

◎人権学習は生涯学び実践していく学習だと思っている。しかし、今日のフォーラムに参加し、教師として行った人権学習が児童の一生に関係してくるということを改めて認識し、子どもが受けた人権学習はその子の生涯を左右するという意味での「生涯」だと思ふとちゃんとしていかなければという思いが強くなった。

資料に原田彰先生のお名前を見つけ、大学生の時に講義を受けたこと、当時の先生のお顔が浮かんできた。何十年もたつての先生のお顔も当時と変わらず、穏やかで優しい表情で気持ちが若返りました。

当時の先生の思いや幼少時からのことをお聞きし、原田先生のご著書の原点が、子どもの時の少年がかけてくれたつづやきだったということも、人権学習と「生涯」がつながりました。

◎小学生の頃から人権学習は受けてきた。そのときは部落地区の方もそれ以外の方も人として同じ。平等に人として生活できるのが当たり前の中世の中という解釈でした。自分の中でも同和地区に生まれたとしても何が違うのか、何も変わらない、人として接するとの思いでした。

部落出身と聞いても「特別視」することが差別であって特に反応を見せず、何も区別することなく接するそれが学習の成果だと思っていました。なので今日のパネリストの方々、A先生の話聞きながら違和感を感じました。

さらに流す＝「特別視」しないことが、本望ではなくもっと反応を見せてほしい、興味を持ち関心を持ち、先につなげていきたいということ。

Cさんが話されていた「部落差別をなくす」ではなく本音で語り合い、自分にできることを考えるということ。表面上の形や特別視をなくすことがゴールではないこと。

存在し続けてもいいので理解した上で受け止め、認め、語り合い、つながり続けていくことが同和問題の本質、学習目標なのではと、今日のフォーラムで感じました。

◎私の心は差別ゼロですが、学習方法・解釈が間違っていたように思います。大変参考になりました。ありがとうございました。

◎Cさん、県外からこられた仲間の方々のつながりに感動しました。人としての心の深いつながり、簡単にできることでありません。人としての心の深さ、広さが皆さんにあるのですね。そのようなつながりを今からでもつくりたいです。

◎パネリストの皆さんがご自身の経験をこれまでのことを振り返りながら話して下さったことがとても貴重な提案として心に届いた。中学校を卒業して26年、22年のお二人。同世代として自分の中学時代に学んだこと、その当時の熱い気持ち・後悔・反省などが呼び覚まされると共に、今の中学校ではその熱がうすれてきていることを知った。

「今の自分」「親になった自分」「教員としての自分」に何ができるのか。

何をしていくべきかを考える良い機会となった。

- ① 子ども達が自分のことを語れる場をつくっていくこと。
- ② 教師自身がその話をきちんと聞いてしっかり受け止めていくこと。
- ③ 友だちの話をきちんと聞いて、自分のこととして受け止めようとする子ども達を育てていくこと。
- ④ 本当の仲間づくりをしていくこと。

この4点が、いかに大切かを実感できた会でした。

◎私が担任している子ども達は年長組です。

この子たち「人の気持ちがわかる子」「相手の思いを考えられる子」「自分を大切にできる子」「友だちの良さを見つけれられる子」に育てていくことで中学校で学ぶ同和教育やこれからの長い人生で出会うかもしれない差別や嫌なことを

乗り越えられる力・基盤につなげていきたいという思いが明確になったように感じます。

まずはパネリストの皆さんの家族のように、子どもたちにたくさんの愛情を注いでいきたいです。また、発言された方に拍手する。この温かい雰囲気人が人権学習に大切なんだなとフォーラムを通して実感しました。しっかり拍手できる教師になりたいです。普段していることだけど、もっと意識していこうと思いました。

Bさんの人の話を聞くときの温かい表情を見習いたいと思いました。

CさんのPTA会長の夢、是非実現してほしいです。実現できそうですね！

◎たくさんの方々の意見を聞くことができ、自分の中にささるような言葉がたくさんあり、少しずつ自分のことに置き換えて考えられることができたなあと思っています。苦手だなあと思う部分が多いのですが、積極的に参加したいと思います。ありがとうございました。

◎A先生の生き方がかっこういいです！

◎差別の厳しさを再確認させていただいた。やはり自分の生まれたところを口にできない人が今もいるという現実。

だれがそうさせたのか考え続けたい。県外からの参加者も増えてきたのはうれしかった。

◎「部落差別なんて本当にばかばかしい。気にしなければ良いのに…」と軽く考えていた自分がいました。

腹を据えて「私は部落出身だ」と相手に打ち明けたとき、軽く流されることの悲しさをお話いただき、自分自身のとらえ方について反省しました。

◎「ひとごと」にしてしまえばずっと「ひとごと」のままで終わってしまうと思います。

まずは、知ろう、共感しようとするところから始めて、「わがごと」として考えていけるようにしたいです。

教師として、一人の日本人として、自分を省みる機会となりました。ありがとうございました。

◎今までどことなく遠い話のように感じていたことが、同年代のパネラーの方々の実体験を聞いていろいろ考えるきっかけとなりました。親として今後子どもを育てていく上でも貴重な話が聞けました。

◎今まで人権教育を何十年も学んできたけど涙が出たのは初めてです。こんなに自分をさらけだして意見を発言しているパネラーの皆様は心を打たれました。

◎部落差別に真に迫る研修機会はなかなかないと思う。このような研修会を通じて、若い世代にもっともつとつたえていくことが必要あると感じた。このフォーラムに参加させてもらうたびに思う、今、部落差別を世間で忘れていることがあると思う。語ること、伝えることは素晴らしい。

◎「ひとごと」から「わがごと」へというテーマのもと、パネラーの皆さんの話を聞き、自分に何ができるかなと考えさせられました。

私自身の人権感覚を高め、子ども同士や人とのつながりを大事にしていきたいと思った。最後に親としてどう伝えるかという話がとても興味深く、A先生の言葉も印象的でした。ありがとうございました。

◎中学校での人権学習の大切さを改めて感じました。正直部落問題はその地区の子の問題と頭のかたすみで思っていたように思います。

地区の子だけでなく、地区外の人たちがどれだけ自分のこととしてどうすべきかを考える機会となりました。一人一人の生き方、人柄をしっかり見てかかわりつながりをもっていきたいと思いました。

◎私が通っていた中学校では、人権学習、特に同和問題についての学習が活発で、中学校の時にはよく考える機会がありました。しかし、すんでいる所から遠く離れた高校に進学すると、同和問題について考える機会は一切なくなりました。

また、他の中学校から来ている高校に家の近い友だちは同和問題について考えたことがないということを知りました。中学校の時の学習からどの差別も無知が一番怖いことで、差別を生む原因であることを知っていたので、その友だちに自分が知っていることを話そうと思いました。このフォーラムでその思いが強くなりました。貴重な機会をありがとうございました。

◎中学校の3年間、人権学習をして、それから高校生になりましたが、人権学習をする機会がほとんどなくなってしま

いました。でも今回の人権フォーラムでまた中学生の頃の思いを思い出すことができました。

私は高校で人権委員会で活動していますが、今回の話を自分の友だちにも言い、語り合える場をつくれたらいいなと思います。ありがとうございました。

◎人権フォーラムに参加して、仮に自分の友だちが部落差別だったとしてもきちんと話を聞くようにしたいです。

◎心に残ったのが、部落差別者だから何かあるのか。部落差別者もふつうの人だと考えていただけだと思います。

◎小学校の時から、部落差別や結婚差別があったけど、昔はその内容をうまく知ろうとはせず、知れませんでした。でも中学生になって、部落差別の内容を授業で受けてみて、あれは大切なことなんだと思いました。今回のパネリストの3人お話を聞いて自分は部落差別、結婚差別を経験したことがないので、重要ななあと思いました。

◎2～3年このフォーラムに参加していなくて今年に出席できて良かったです。部落問題学習は自分自身を解放することだと再確認できました。ありがとうございました。

◎今回2度目の参加となります。A先生を筆頭にパネリストの皆さんの思いを語っていただき心の中が熱くなるのを感じました。同和問題を考え学習することは、人間らしく自分が生きられる大切な学びだと実感しました。自分ができること、また、自分をもっと磨けるようにしたいと思いました。心の栄養を頂きました。ありがとうございました。

◎今回2回目の参加になります。A先生とパネラー3名の話聞き、より一層人権問題に興味をもちました。仲間をつくっていくことが差別をなくす、いじめをなくすことにつながっていくことになる。これからも自分が変わっていくことが、差別をなくすことにつながると思います。

◎特に教育者が頑張してほしいと思います。応援していきたいと思います。

◎学校の方へ向かず、生徒の方を向いて仕事をという言葉がとても印象に残っています。自分はどこを向いて仕事をしているのか時々わからなくなります。自分は他人ごとで生活しているのかなと感じます。うまくできないことを他人のせいにして、自分には関係ないから考えなかったりと逃げてばかりだなと思います。

◎今日は自分をみつめ、どうにかしようとした一日でした。悩んでいる生徒、仲間のことをしっかり考え、受け止めていきたいなと思いました。

そのために今日気づかせてもらえたことは、自分のこと(強さ・弱さ)をしっかりとさらけ出し、自分を認識し、もし誰かに悩みを打ち明けてくれたら共感し、しっかり受け止めることです。今日から自分を少しでもいいから変えていきたいと思いました。

◎人権や差別、被差別のいろいろな人権のことが学べました。この学んだことは一生忘れません。

◎「地区外の子どもにとって全体学習が思い出になっている」冒頭のA先生の言葉が今の自分と重なり情けなくはなずかしくなりました。同和問題学習に熱心に取り組んでいたあときの自分、今日のパネリストの若者達の生き方にあのときの自分に負けない生き方を求めているいきたいと思います。ありがとうございました。

◎フォーラムに参加して今回の会で感じたこと

① 同和問題と人権問題と最近では2つある

② 私は八十路を過ぎました。小さいときと今の世の中では、大きく変わっています。

私たちの世代は口に出して言っていました。何も知らない顔をして過ごすのがいいのでしょうか。

③ 昨日仲間と一緒に施設へ訪問に行きました。空き地でグランドゴルフをさせてあげたのですが、人は心と心がつながればわかりあえる、うれしいことは一緒に喜んであげると思った一日でした。